

【論文】

明治期のニーチェ主義と教育学 (2)

—高山樗牛と坪内逍遙の教育的対決—

松原岳行

はじめに

明治期以降の日本の教育学にニーチェ (Friedrich Nietzsche, 1844-1900) の思想がどう受容されたのかを検討する際、高山樗牛／林次郎 (1871-1902) と坪内逍遙／雄蔵 (1859-1935) を中心に繰り広げられた美的生活論争はきわめて重要な意味を持っている。

その美的生活論争について、杉田はこう述べる。「今日では想像もできないほどの影響力をもっていた新進評論家のアイドル高山樗牛と、文壇の大御所坪内逍遙というとりあわせに加えて、西洋でそのころ最も問題視されていたニーチェがそのテーマであったことを考えるなら、西洋の新思想に敏感な当時の文壇の視聴がここに集まったのも当然であろう。」(杉田 2010, 25頁)

一方で、ニーチェ思想を鼓吹するニーチェ主義者がニーチェブームを巻き起こし、他方で、ニーチェ思想そのものやニーチェ主義に対して反対の声があがる。このように、いわゆる美的生活論争においてニーチェが果たした役割はたしかに大きい。しかし、ニーチェという争点が強調されすぎたためにかえってその背後にある別種の要因や意味などが見落とされてしまっている可能性も否定できない。

たとえば西尾は美的生活論争を次のように特徴づけている。「ニーチェの思想を極端な自我鼓吹の個人主義思想とみなす根本の考え方で、両派は共通していたわけだから、思想の解釈そのものが論争点になることはまったくなかったといっている。それがこの時代の特徴であり、限界である。要するにラディカルな個人主義思想として定義づけられたニーチェ主義を認めるか否かが、唯一の論争点であった。」(西尾 1977, 8頁)

西尾もこう言うように、ニーチェ思想を極端な個人主義として理解／誤解したのは両陣営とも共通しており、このように誤解されたニーチェ思想を賛成するか反対するかがほとんど唯一の争点だった。これについては、杉田も「当時のニーチェ問題の焦点は、いわゆるニーチェの

個人主義、利己主義、本能主義は是か非かという点に集約された」(杉田 1966、22頁)と、同様の見解を示している。

しかし、それぞれの陣営がなぜニーチェ思想に対して賛否の声をあげたのか、その理由や意味はこれまでほとんど問われることはなかった。そこで本稿では、これまで主に文学やニーチェ受容の視点から問われてきた美的生活論争を別の視点から捉え直し、高山と坪内による論争が持ち得た本来の意味を解明したい。

ここで想起したいのは、高山と坪内がともに教職従事経験を有していたという史実である。なぜなら、これは美的生活論争を「ニーチェ論争」から「教育論争」へと読み換える手掛かりとなり、教育学におけるニーチェ受容史の解明にもつながるからである。

もっとも、高山と坪内の教職従事経験についてはそれぞれ先行研究もあり、これ自体が新事実というわけではない。たとえば高山樗牛については、その国家教育思想を明らかにしようとした雨田による一連の論文(雨田 2001、2002a、2002b、2003、2004、2005、2006、2007)があるし、坪内逍遙についても、その教育者的側面に着目した研究には一定の蓄積がある(原田 1957、和田 1960、橋本 1994、櫻井・菅 1998、増田 2009、花輪 ほか2014、2016、2017)。しかし、両者による論争の詳細、とりわけその教育的意味を解明した研究は管見の限り見当たらない。果たして高山と坪内はどのような点をめぐって論戦を繰り広げたのだろうか。

以上のような問題関心に基づき、本稿では、美的生活論争の枠に収まらない両者の発言を時系列的に辿り、その対立構造や教育への関心を確認した上で、従来もっぱらニーチェ論争として捉えられてきた美的生活論争を高山樗牛と坪内逍遙の「教育的対決」として再解釈したい。

1. 高山と坪内における二重の対立構図

まず指摘しておかなければならないのは、高山と坪内のファーストコンタクトが美的生活論争よりもかなり前だったということである。具体的に言えば、高等中学生時代の高山が行っていた文芸活動が日本文壇の大御所たる坪内逍遙の眼に留まり、少なくとも1892年の時点で両者のあいだに接点ができているのである。長尾は2016年の著作『<憧憬>の明治精神史—高山樗牛・姉崎潮風の時代—』の中で次のように述べている。

「明治二十五年五月九日付で高山が坪内に宛てた書簡には「早稲田文学其都度々々御送被下感佩之至ニ御座候、兼て御約束之当校文学会雑誌俄之障害之為ニ遷延候段御海容可被下候」とある。「俄之障害」とあるので、その後無事に雑誌が発行されたかは不明だが、高山が坪内に雑誌を送る約束をしていた点は重要である。地方で細々と発行されていたに過ぎない校友会雑

誌が、当時の文学界の頂点に位置していた『早稲田文学』と交換される可能性があったことを意味するからである。このような手ごたえがあったからこそ、国家エリートとして育成されてきた彼らは、「事業」としての文学に対して存分に没入することができたのだといえよう。」(長尾 2016、93頁)——文学青年だった高山が坪内にラブコールを送っていたということであろう。高山にとって坪内は当初まさに「憧憬」^{註1}の対象だったのかもしれない。ただ、高山と坪内のあいだにはまもなく敵対関係が生ずることになる。

高山は1893年に帝国大学文科大学哲学科に入学し、1894年には匿名で応募した『滝口入道』が読売新聞の懸賞小説に入選し、同新聞紙上で連載された。この審査員の一人がほかならぬ坪内逍遙であった^{註2}。しかし、高山は坪内が『滝口入道』の審査員であったことを知ってか知らずか、この頃から『帝国文学』や『太陽』に文芸評論を寄稿し、坪内逍遙の作品や発言に対する批評を開始する。ちなみに、『帝国文学』は帝国大学文科大学が早稲田大学の『早稲田文学』に対抗して創刊した文学雑誌であり、『太陽』は数年後に高山自身が編集担当となる総合雑誌である。

1896年に大学を卒業後、高山は仙台の第二高等学校教授となり、1897年6月には東京の博文館に入社する。高山が博文館に入社した1897年はちょうど同社創業10周年にあたる時期であった。これを記念して発行された『太陽 (博文館創業十週年記念臨時増刊)』第3巻第12号に高山は「明治の小説」と題した評論を寄せ、その中で明治小説の第二期を「写実小説の全盛時代」と特徴づけつつ、「坪内逍遙が小説神髓出でてより、俄に其勢を得、忽にして化政以来小説壇を壟断したる伝奇小説を圧倒して、優に文学世界の重要な勢力と化し来れり」(高山 1897、683頁)と述べ、文壇に写実主義という新風を吹き込んだ点において坪内の『小説神髓』を評価している。

しかし、ちょうどこの臨時増刊号に掲載された『小説神髓』のアンサーブックとも言うべき『当世書生氣質』については、「逍遙が書生氣質は、其根本的精神は素より写実的なりしが、其文体、意匠等に於て多少旧伝奇小説の風ありし」(同上)と述べ、旧習を完全に克服できているわけではないとして限定的な評価にとどまっている。明治4年生まれの高山にとって、安政6年生まれ坪内は古い時代を生きた年長世代に思えたのである^{註3}。

こうして高山は、文学の世界に足を踏み入れるきっかけを作ってくれた坪内に対して論戦を仕掛けていく。花澤も言うように、高山樗牛と坪内逍遙の論争は「歴史劇論争を皮切りに、歴史画論争、ニーチェ論争(美的生活論争)へと領域を広げながら展開していく」(花澤 2013、129頁)が^{註4}、この両者は、高山が1902年12月に早逝するまで常に論争状態にあった。この背景には、ベッカー(Becker, H.J.)が指摘する二重の対立構図があったと言えるだろう。

ベッカーは1893~1903年の日本における初期ニーチェ受容史をテーマにした学位論文の中で次のように述べている。「ニーチェ論争を巻き起こした決定的要因は、この国で名声を誇る二

大学の対抗関係にも求められよう。この第一の要因に加え、世代間ギャップという第二の要因も指摘されなければならない。早稲田か帝大かを問わず、年長世代の教員（井上、逍遙、加藤）は、ニーチェの個人主義に対して徹底抗戦の構えを見せた。（…略…）年長世代は、国家という決定的立場を色濃く反映させた強固な儒教的価値観の中で成長したのである。このことを踏まえれば、極端なエゴイズムというかたちで出現するニーチェの個人主義に対して年長世代があらゆる手段を講じて闘争を挑んだのはむしろ当然と言えよう。」（Becker 1983, S.191-192）——高山と坪内の両者には、ベッカーが指摘する「①帝国大学vs早稲田大学」および「②青年世代vs年長世代」という対立構図がそのまま当てはまると言えよう。高山と坪内は半ば宿命的に対立関係を築かざるを得なかったのである。

2. 高山の教職時代—倫理科教科書の執筆—

1895年6月から9月にかけて高山は『哲学雑誌』に「道德の理想を論ず」と題する一連の文章を発表した。また、先述したように、高山は1896～1897年に仙台の第二高等学校教授をつとめていた。こうした経緯も手伝ってか、高山は帝国大学時代の恩師である井上哲次郎とともに『新編倫理教科書』の執筆に従事する。5巻から成るこの教科書は1897年3～4月に刊行された。

井上哲次郎は哲学者であり、いわゆる教育学者ではない。しかし船山も言うように、井上には国民道徳的ないし国家主義的な教育時論が少なくなく、「教育界においても隠然たる勢力をもつていた」（船山 1957、2頁）。1897年3月21日に金港堂から刊行された『新編倫理教科書・巻一』の「叙」で井上哲次郎は次のように述べている。「因りて頃ろ文学士高山林次郎氏と相謀り、我邦今日の状態に適切なる倫理教科書を編成せんと欲し、屢々会合して此事を論じ、遂に此書五巻を著はし、題して新編倫理教科書と云ひ、以て聊教育界の欠点を補はんと欲す。」（井上・高山 1897a、叙3頁）——この言葉からも明らかなように、『新編倫理教科書』は井上が主導権を握っての共著企画であり、少なくとも井上には教育界の欠点を補おうとする明確な意図があったのである。

この背景には、『勅語衍義』を執筆した井上自身の誇りと使命感があった^{註5}。1891年9月に発表された『勅語衍義』は、「勅語の官制的解説版として作用し、その後の日本の思想界、教育界に強い影響をあたえ、日本教学の方向を決定づけたものである」（船山 1957、2頁）が、『新編倫理教科書』はまさに『勅語衍義』の主旨を具現化した最初の倫理教科書にほかならなかった。それは、「我邦に於ける倫理科は勅語の主意に本き、我邦の事情を参酌して之れを教授せざるべからず」（井上・高山 1897c、緒言2頁）という『新編倫理教科書・首巻』の「緒言」を

見ても明らかである。

1897年4月刊行の『新編倫理教科書・巻四』「結論」は次のように締めくくられている。「国家的道徳は須らく一国教育の基礎たるべし、国家的教育即ち是なり。維新以来我邦人が欧州の文物を採るに当り、長と短とを問はず、彼国の事物を以て尽く之を善しとなし、東洋の事物は尽く陳腐として之を退け、遂に我帝国固有の徳教をも併せて之を放棄せんとするに至る。是を以て世人各々其見聞する所に惑ひ、左支右吾、茫々然として其適従する所を知らざるの情状を呈せり。我至仁至慈なる天皇陛下深く之を軫念せられ、明治二十三年十月、教育に関する勅語を下し、懇に忠信孝悌共同愛國の大道を示して国民をして矜式する所を知らしむ。我邦臣民たるもの謹んで聖旨を奉戴し、以て国家的教育の美果を挙げんことを期せざるべからず。今や我邦は已に物質上の文明を輸入して一個の外形を新にせり。之に接ぐに道徳上の改良を以てし、拳國の臣民真正なる国家的教育の薫陶を受けて生長せば、國威の振張日を期して待つべきなり。」(井上・高山 1897e, 51-52頁)

西洋思想の輸入に依存していた当時の趨勢を疑問視し、教育勅語に基づく日本固有の道徳教育を求める論旨であることは明白であろう。少なくとも井上の場合、『勅語衍義』の著者という立場とも整合する。では、高山の場合はどうだったのだろうか。そもそも『新編倫理教科書』における高山の役割や位置づけをどう理解したらよいのだろうか。

先行研究の知見を借りるなら、高山はこの企画にあまり積極的に関わっていない模様である。たとえば雨田は次のように述べている。「桑木巖翼に宛てた高山の書簡には「例の教科書(中等倫理教科書のこと)の如きもの片腕にまとひつき、今更後悔先にたず、困却罷在候。」とある。この書簡にある「困却」が、都落ちと感じた仙台暮らしが不本意で「後悔」しているのか、教科書執筆を引き受けたことを「後悔」しているのかははっきりしない。けれども、少なくとも、彼が積極的に教科書執筆に関わっていた様子は読みとれない。」(雨田 2002a, 173頁)

また前田は、「樗牛にとって、この『新編倫理教科書』の執筆は、不幸な選択であったように思われる」(前田 1973, 41頁)と一歩踏み込んだ発言をしているが、それは「キリスト教攻撃に起ち上った井上が、高橋五郎から「偽哲学者」と罵倒され『国民之友』誌上に自ら敗北を認めた公開状を発表して、世論の嘲笑を買った」経緯に加え、「半ば官選の「教育勅語」解釈書、『勅語衍義』の著作者である井上が編纂する倫理教科書の執筆を引き受けることが、彼の思想的立場をきわめて危険な場所に追い込むこと」を高山は十分に知っていたからだという(同上)。それでもなお高山が『新編倫理教科書』共著の誘いを受けたのは、いわば「井上の歓心を迎えるための献身」(同上)であり、席次五番の高山が第二高等学校教授の職を得た要因だったと前田は分析している^{註6}。

嫌な思いをしてまで勝ち取った二高教授のポストだが、高山は1年足らずで辞職し、文学の世界に足を踏み入れている。地方の一教員として教育実践に従事するよりも、上京して出版社に奉職し、雑誌出版を通じて多くの青少年に自分の思いや考えを伝える道を選んだわけである。これを教育からの離反と捉えるべきか否か。

井上との共著『新編倫理教科書』の執筆を経験する中で高山は逆説的に、学校教育の枠にとどまらない教育の可能性や意義を感じたのではないか。『新編倫理教科書』の共著者になったこと自体は「不幸な選択」だったかもしれないが、そのことがかえって、教科書や学校教育にとらわれない自由な教育のかたちを模索する契機となったと解釈することもできよう。だからこそ1年で教職を辞し、より大きな教育効果と影響力を手に入れるべく、雑誌記者になったのである。

3. 坪内の教職時代

(1) 教育者としての坪内

1885年に『小説神髓』や『当世書生気質』を発表し、すでに文学者として一定の地位を築いていた坪内であるが、教育にも高い関心を示していた^{註7}。

原田は1957年論文「教育者としての坪内逍遙」の中で次のように言う。「すでに述べたように、東京専門学校は学問の独立という明白な教育方針を掲げて、講師も学生も強くその精神に立つて進んでいたわけであるが、逍遙は、さらに独自の識見にもとづいて、学園をして真に教育的意義ある学府たらしめるためには、学生をして広い意味の文学を味得させて高い教養を体得させねばならないということを強く考え、それには教養的な文学的学科を教授して調和ある総合的な教養への指導を实践せねばならないとしたのであつた。やがてこの熱意が実現されて、明治二十三年（一八九〇年）東京専門学校に文学科が増設された。これが世にいわゆる「早稲田の文科」の発祥である。この設置は、全く逍遙の熱意によつてなつたといわねばならなかつた。この時逍遙は三十七歳、東京専門学校の創設後八年であつた。わたくしたちはここに先ず、逍遙の教育者としての広くそして高い識見と、その逞しい実践力とを、看取せねばならない。」(原田 1957、59頁)

このような教育への高い関心はやがて自ら教育実践に従事する気概を生じさせ、坪内は1896年から早稲田中学の教頭をつとめることになる。最後の1年ほどは校長として1903年まで奉職したというから、高山に比べてかなり長期間教職に就いていたことになる。坪内がとくに力を注いだのは倫理教育であった。「逍遙は、中学生に対する修身教授に熱中したのであるが、何

よりも先ず自己自身の修身につとめ、説くこと訓えることは必ずこれを実践するという、非常に強い決意と意気込みとをもつて対処した。なおその教授法の研究も凡常の程度ではなかった。」(前掲書、65頁)

原田もこう言うとおりに、坪内は倫理教育の理論構築というよりはむしろ倫理科授業に重きを置き、オリジナルの教授法や実際案に基づいた授業実践を精力的に行ったとされる。「逍遙の教授は、具体的明晰と聴者の自発的知解とを支柱とし、幾多の例話を配し、社会的現象に具体的に結びつけ、感興を誘起しないではやまないていの、極めて特異のものであつたと伝えられている。修身の時間が何よりも楽しみだつた、待ちどおしかつたという追憶は、当時親しく逍遙の教えを受けたものの齊しく告白するところで、訓化の実際に挙げた事例も数々伝えられているのである。」(同上)——このように、坪内は教師としての評価も高かったようである。では、坪内は倫理教育について具体的にどのような発言をしているのだろうか。

(2) 坪内の倫理教育論

1898年4月、坪内は『早稲田文学』に「方今の小中学徳育及び其の弊」と題する一文を発表し、「実際に於ける倫理教育の振はざること恐らく我が今日の教育界より甚しきはあらじ」(坪内 1898、24-25頁)と、道德教育の現状に対する不満や危機感をあらわにする。「今の小中学の倫理教育は概して形式的、実利的、皮相的也、要するに装飾的也」(前掲書、25頁)と批判する坪内は、1899年1月、『日本教育』第1号^{註8}に「方今の倫理教育に就きて(再び)」を寄稿し、より具体的に倫理教育の問題点を指摘する。「小学校に於ける修身課も、中学校に於ける倫理科も、其の第一の目的は品性の陶冶即ち感化の実効に在ることは今更言ふを俟たぬ所なれど、又所謂徳育は一種の情育たるに外ならねば、少くとも其の端を發く初めに当りては、主として先づ情育的手段を取るべく、彼の智育的手段の如きは寧ろ賓位にのみ置かるべきものなること、是れ將た殆ど争議せらるまじき程の通理なれど、尚方今の小中学に就きて其の倫理教育の實際を觀来れば、事實は全く此の理と相反す。」(坪内 1899a、3頁)

坪内によれば、修身科や倫理科における道德教育の第一目的は品性陶冶であって、その教育方法は一種の情育でなければならないはずであるが、実態は全く異なるという。

倫理教育の第一目的たる品性陶冶の実効を挙ぐること能はざるや一なり。彼の泰西倫理書の翻訳若しくは義訳に類するもの、若しくは常識的倫理論又は普通国民心得ともいふべき類の教科書に依りて毎週一時づ、何等の熱もなき乾燥なる講話をなすもの、或は教育勅語の字句にすがりて教訓を設け、何等の統一も無く連絡も無く、只勅語に見えたるまゝの順

序に因りて種々徳を説明し講述するもの、或は論語、中庸等をさながらに教科用書として字句の解釈に拘々たるもの等はいづれも皆一種の智識教授たるに外ならざるものなり。就中最後のもの、如きは往々にして純乎たる漢文教授の無効無用なるものに類することあり。(同上)

平凡な教科書を用いた無味乾燥で形骸化した授業、教育勅語に並んだ徳目を機械的かつ字義通りに伝達する授業、論語や中庸をテキストとする漢文のような授業——徳育が知育に偏っている現状をこう特徴づける坪内がもっとも問題視したのは、教育勅語に依存した形式的徳育であった。

この種の問題意識はすでに1898年発表の「方今の小中学徳育及び其の弊」にも確認できる。「徒らに 勅語の字義に拘泥し、句々の例話を説き、さながら直[・]諷[・]的に 勅旨を伝えて以て徳育の能事畢れりとなすが如きは形式的徳育の甚しきものにあらずや。」(坪内 1898、25頁)——教育勅語の徳目を字義通りに伝達するような教育方法を坪内は「機械的教育」や「ほんの儀式的薰陶」と名づけ、「かくの如きは甚だ劣等なる教育法たると同時に、また甚だ危険なる教育法なり」と断罪する(坪内1899b、5頁)。

また、1899年3月に発表した「現行諸倫理教育方案の根本的誤謬」^{註9}では、いわば教育勅語中心主義とも言うべき学校教育の現状を次のように描写している。

都鄙の小中学校の当事者等が、現に行ひつゝある所を觀るに、彼等は、大祭祀日の来る毎に、必ず全校の生徒等を集めて、いと厳肅なる勅語捧読式といふ事を行ふことを以て、欠くべからざる恒例となせるのみか、且つ、勅語を大書し若くは金字摺に物しなどして、一大額面にしたて、校長室、教員室、又時としては倫理講堂に掲げ置きて、生徒等の目に触易からしめ、以て其の記誦に便にす。或はまた打つけに、勅語の本文につきて解釈を施し、例話を附し、其まゝ移して教科書とし、又は講話の材料として、毎週教訓の用に供す。かくても尚足れりせずして、或は閉校式又開校式に、或は卒業式に、甚しきは運動會に、茶話會に、機會ある毎に勅語を引用し、忠、孝、和、信、義勇、奉公の訓誡を反覆して、以て教訓を垂るゝを常とす。(前掲書、4頁)

直接の批判は避けているが、教育勅語を学校の教育活動全体で活用しようとする風潮を疑問視していることは明らかであろう。こうして坪内は、教育勅語の機械的伝達が必ずしも明治天皇の意向に添うわけではないこと^{註10}、また教育勅語の直諷的講述はそもそも教育者に課せら

れた本来の使命ではないことを訴える。「若し機械的に反覆して種々徳の名目、釈義、例話、論贊、等を注入することが、最も有効なる倫理教育の手段ならんか、今の小中学の生徒等は、此の種注入の功德によりて、其の長ずるや、挙げて大々善なる良国民とならざるを得ざるべく、またかくの如く直訳的に、聖論の有りのまゝを口伝することを以て、教育家が為し得べき唯一無上の能事とせば、今の小中学の教職員こそは、げに十二分に其の職責を尽し得たるものと言ふべし。されど、かくの如き直訳的事業は、果して教育当事者の真正の任務なるべしや、否や。国民教育に関して下し賜はりし 陛下の聖旨は、果してかくの如くにして貫徹し得らるべしや、否や。」(前掲書、45頁)

坪内自身も、「我々教育に従事せん者が、爰に實際教育の理想を置き、準拠を求め、原案、原則を見いだすべきは、今更言ふを俟たぬ次第」(前掲書、5頁)と述べ、教育勅語のような原則や理想の意義は十分に認めていた。ただ、同時に彼は「さりとして、原則は原則にして、実際方案は実際方案なり」(同上)と述べ、「此の実際方案の良否次第にて、原則の死活も、理想の消長も、決定せらるべき次第なれば、実際教育の上よりいへば、所謂実際方案ほど大切至極なるは無き道理なり」(同上)と、あくまでも実際方案の優位性を強調する。坪内に言わせるなら、教育基本法や学習指導要領のような原則それ自体よりも、実際の授業を行うための教材研究や学習指導案こそが重要ということである。

「詮ずるに、所謂形式流は、全く前に謂へる勅語直訳流に原因し、勅語直訳流は、全く前に説明せる原則と法案との無差別、混同に胚胎す。是れ、取も直さず、方今の倫理教育界に横たはれる根本的誤謬の随一なり。」(前掲書、6頁)——こうして坪内は、実際の授業よりも原則に固執する倫理教育の現状を根本的誤謬として厳しく批判すると同時に、学校教育の枠内における倫理教育の可能性を自ら模索したのである。

4. 倫理教育をめぐる論争

(1) 坪内による『新編倫理教科書』への言及

では、坪内は井上と高山の共著『新編倫理教科書』をどう見たのだろうか。注意しなければならないのは、坪内の批判対象があくまでも勅語直訳流の倫理教育であって、教育勅語そのものではないことである。彼の真意は必ずしも定かではないが、少なくとも表面上、坪内は教育勅語の内容そのものについて直接の価値評価を避けているような印象である。

坪内は、教育勅語に準拠した徳育の実際方案について次のように述べる。「此の種の論者の鐵壁は万世一系、君民同祖、無比の国体といふことなり。就中、君民同祖といふことを中心の

要義として、爰に国民道德の根柢を据ゑ、倫道を説くに当りては、孝を発起点となすと同時に、忠孝一致といふことを唱へて、いみじくも私徳と公德とを綜接す、かるが故に、秩序井然として、加ふるに一理貫透の妙致あり。前掲諸方案に勝ること万々、現行德育諸方案中の白眉とも評すべし。」(前掲書、11頁)——このように坪内は、君民同祖や忠孝一致という理念をベースにして私徳と公德とを統合するタイプの実際方案を高く評価しているが、注目すべきは、この文脈において坪内が井上と高山の共著『新編倫理教科書』に言及している点である。「近時新撰の倫理教科書類は、大抵此の説に則りて編著せらる。例へば井上哲次郎、高山林次郎両氏共著の『倫理教科書』の如き、明かに此の種の意見に基きて著されるものといふべく、若しくは井上円了氏撰の『中等倫理書』、是れも根柢は同じ説に存するもの、取りわけて、秋山四郎氏編『中学倫理書』に至りては、簡短に件の旨を代表し得て、最も通俗に平明也。」(同上)

また、『日本教育』第6号に掲載された「現行倫理教案の根本的誤謬(承前)」でも、「井上哲次郎、高山林次郎両氏共著の『新編倫理教科書』首巻にも亦た曰はく」(坪内 1899c、1頁)として、忠孝一致に関する箇所を同書から引用しつつ、「彼の中学校倫理科細目取調の結果たるに外ならずと雖も、亦以て此の種国家主義的倫理教育案の現教育社会に歓迎せられつゝあるの一徴となすに足る」(前掲書、2頁)と述べ、井上と高山を「教育策士」(同上)と特徴づける。「策士」という言葉を字義通りに捉えるべきか、それとも皮肉と捉えるべきか。坪内の意図は必ずしも定かではないが、井上と高山の教科書が教育界に歓迎されていることは認めていると言えるだろう。いずれにせよ、倫理教育に関して坪内はあからさまな高山批判を行ってはいないのである。

(2) 高山による坪内批判

しかし、高山は坪内に食ってかかる。1899年5月、高山は『太陽』に「坪内雄蔵氏の倫理教育論を読む」と題する一文を掲載し、「是際学識経験者併び備はれる坪内氏より、是の剴切なる意見を聞くを得たるは、吾人が潜に見て教育界の慶事とする所也」(高山 1899b、62-63頁)と述べつつ、「唯恨むらくは氏の論中、聊か二三の首肯し難き点あり」(前掲書、63頁)として反論を試みる。

まず勅語直訳流とも言うべき倫理科の現状について高山は次のように述べる。

倫理科の講話は、今の教育制度にありては、一週厘に一時間なるに非ずや。それも智力上の学科ならば、其教授の結果著しきを得べけむも、倫理科は、坪内氏が言へる如く、品性陶冶を主眼とする者也。而して品性なるものは、言ふまでもなく数学物理学などの如く理

論によりて注入、もしくは開発せられ得べきにあらず、実に人心活動の全範囲に渉り、あらゆる経験の能感発受に成れるレザルタント也。かゝる品性を一週一時間の講話もて根本的に左右し得べしとは、吾人の思惟し能はざる所也。(前掲書、63-64頁)

このように、そもそも倫理科の授業は1週間に1時間しかないため決定的な影響力は持ち得ないこと、また坪内自身も強調しているように倫理科はあくまでも品性陶冶を主眼とする教育活動であることを強調する。「品性陶冶のまことの学校は社会全体なりと見るを妥当とすべし」(前掲書、64頁)という道德教育観からも明らかなように、高山は、単なる機械的教授に墮した倫理科授業を批判し、「学校教育に於ける倫理科の講話は、学校以外に養はれたる道德的品性を明白にし、確実にし堅固にする事に於て、其最も重要なる価値を有すべき也」(同上)と述べる。学校の教育活動全体を通じて行われる道德教育を「特別の教科 道德」が補充・深化・統合する現代の道德教育と同様、高山は、学校以外で養われた道德的品性をより明白かつ確実に体得させる点にのみ倫理科の存在意義を認めている。このとき、ちょうど今日の学習指導要領のように、倫理科授業の大きなバックボーンとして教育勅語が必要不可欠だと高山は言うのである。

「坪内氏は以為らく、教育の勅語は父兄教師の読むべきものにて、子弟に教ふべき性質のものに非ずと。其文体は或は然らむ、されど忠孝二道と挙国一致とが、国民道德の大本なること、彝倫の教奉公の區に到るまで、孰れか少年子弟が旦夕奉体すべきものに非らむや。品性陶冶の心理上の教育法の如きは、素より勅語に求むべからず、されど吾人の所謂品性を確実にし、道念に明白なる意識を与ふる上に於て、いとも大なる効力あるべきこと、誰かは是を疑ふべき。」(前掲書、65頁)——坪内が言うように、原則と実際方案は分けて考えるべきであろう。しかし、教育勅語の内容はたとえ文体が難しいとはいえ品性陶冶上きわめて重要な意味を有しており、この原則に基づいた教育を行うこと自体に問題があるわけではない。高山はそう考えたのである。

(3) 高山と坪内の奇妙な関係

高山による坪内批判は以上に見たとおりであるが、果たして両者の間にどれほどの見解の相違があるだろうか。

そもそも教育勅語に否定的であることは許されない時代にあつて、両者とも教育勅語の存在そのものは承認の立場である。また、忠孝一致や君民同祖という趣旨にも賛成であるが、その趣旨を知的に教授する勅語直訳流の倫理科授業には両者とも反対である。さらに、道德教育や

倫理教育の本質を知的教授ではなく品性陶冶に見出している点も同じである。強いて言うなら、坪内は実際に倫理科の授業を受け持っていた立場から「実際方案」を重視し、高山は『新編倫理教科書』を執筆した立場から「原則」（教育勅語）を推している点にコントラストを認められる程度である。

たとえば坪内は「さるにても、理論上に於ては、倫理教育の目的の主として品性陶冶に在ることを了解したるらしき当事者、且つ其第一着手段の多少情育的なるべきをも会得したるらしき当事者が、何故に其の実際に当るに及びては斯く相反せる手段を取れるぞ」（坪内 1899a、4頁）と問い、「是れ第一の疑問なり」（同上）と述べているが、これは坪内の潜在的な批判意識なのかもしれない。高山を直接批判した文章ではないが、坪内に言わせれば高山はまさにこの部類に入るといふことだろう。坪内から見れば高山は必要以上に教育勅語寄りだし、高山から見れば坪内は教育勅語を不当に軽視しているというわけである。

しかし、別の視点からみれば、高山は「品性陶冶のまことの学校は社会全体なりと見るを妥当とすべし」（高山 1899b、64頁）という見解からも明らかなように、倫理教育観においても学校外志向が強く、教育勅語をことさら強調するような姿勢も見受けられない。一方の坪内は、教育勅語から距離を取るリベラルな倫理教育観を持っているが、倫理科の実際方案を重要視していることに象徴されるように学校内志向が強い。このように、倫理教育をめぐる両者の見解はいわば“ねじれ”の位置にあると言える。

ここから見えてくるのは、論点の空白とも言うべき両者のすれ違いであろう。両者の間には、まさにベッカーの言う①世代間ギャップと②ライバル大学同士という宿命的対立構図に基づく、アプリアリな敵対関係が存在していたのである。いずれにせよ、倫理教育に関して言えば、教科書執筆者の高山が理論側、早稲田中学で教壇に立っていた坪内が実践側の立場にいたことは間違いない。しかし、先述したように、高山は教科書執筆からも学校教育からも逃れ、文壇へ飛び込む。この行動の背景には、学校教育の枠外で自由に行われる「読書」への期待があった。高山は、自己修養の可能性を模索する新たな教育実践にチャレンジしようとしたのかもしれない^{註11}。

5. 高山の青少年教育観

(1) 読書の教育的意義

高山は1895年11月、「島国的哲学思想を排す」と題した文章を『哲学雑誌』に発表し、青年学生に向かって次のように勧告している。「予輩は我邦の青年学生に向て敢て独創の意見を構成する前には予め十分純然たる客観的考究に其身を委ねむことを勧告するものなり、且に一書を読みて夕に一説を構へ、猥に異を樹て新を銜ふは遂に思想的大国民の風度に非るなり。」(高山 1895e、895頁)——さまざまな本に影響を受けては一朝一夕に自説を吹聴するのではなく、まずは十分に客観的考究に専心すべきことの重要性を青少年に要求した文章である。24歳とは思えないほどの落ち着きぶりで高山が強調しているのは、エビデンスに基づかない発言の自重と「読書」の重要性であろう。

1898年1月、博文館発行の雑誌『少年世界』^{註12}に高山は「少年読書の法如何」という一文を寄せ、「学問は言ふまでも無く学校の教育を必とす、然れども良師は是を座右に致し難し、畢竟吾人の学問は書典に拠らざるべからず」(高山 1898a、17頁)と述べている。青少年を教育する上で学校教育は必要だが、必ずしも良い教師と巡り会うとは限らないため読書が重要であるという意味であるが、どのような本を選択するかによってその効果は大きく左右されるという。

「有害無益の書を読むは、博奕遊戯に耽ると何ぞ選ばむ、是に於てか書典選択の要あり。業は其学を異にし、学は其書を異にす。吾人素より万人に通じて一定の書を規示する能はずと雖ども、少年諸子の智徳を修養し、志気を振興する所以の書に於て一言せざるべからざるものあり。蓋し人は親好の友によりて其人物を知り得べきが如く、其愛読の書によりて其品性を察し得べし。そは書典の人心を感化するの勢力、決して朋友に譲らざる者あればなり。」(同上)——読書には感化力がある。だからこそ本の選択は重要であり、青少年が選択すべき本は有害無益のものではなく、智徳を修養してくれるような自分だけの一冊であるべきだという。ただ、高山は「読書の第一義」として、「年少の間は成るべく事実を記載せる書を読むことを務むべし」(同上)とも述べ、青少年の読書には、小説のようなフィクションではなく、客観的事実を紹介した書籍を選ぶよう推奨している。学校教育の枠にとどまらない教育の可能性の模索していた高山は、読書にその教育的意義を見出したのである。

(2) 高山による青少年批判

しかし、高山が目当たりにした青少年教育の実態はあまりに理想と懸け離れたものであっ

た。この時期から徐々に青少年に対する風当たりが厳しくなってくる。

たとえば1898年10月刊行の雑誌『中学世界』^{註13}の「文界時評」欄に掲載された「西郷南洲の銅像」^{註14}において高山は次のように言う。「今の青年は、動もすれば其資産を顧みず、其材器を思はず、其健康を察せず、他人の能くする所我亦能くすべしと揚言し、其父兄を苦め、其心身を勞し、而して得る所無きものあり、真に憂ふべき也。」(高山 1898c、8頁)——高山に言わせるなら、今の青少年は根拠無き自信家であり、家庭の資産を浪費する親不孝者でしかない。要するに、読書以前の問題だというわけである。

もっとも、旧習に固執する年長世代との対比において、高山は青年世代に期待をかけてはいる。実際、『中学世界』に寄せた1899年3月論文「新しき日本」にも、「新らしき日本は老衰の元老に訣別すべき也、依頼すべきものは唯是新日本の新教育に人となれる新人物のみ」(高山 1899a、3頁)という発言があり、明治期以降に生まれた青年世代で新時代を築いていこうとする高山の意気込みや使命感を読みとることができる。しかし、だからこそ高山は青少年たちに対して新時代を担う覚悟の有無を厳しく審問する。「敢て再び請ひ問はむ、卿等の覚悟、卿等の抱負如何。吾人は特に是一言を以て全国の中学生諸子に警告する者也。」(同上)

高山がもっとも嫌ったのは、自らの不勉強を棚に上げ、世の中の不正や腐敗を上から目線で批判しようとする世間知らずの青少年であった。1899年12月、高山は「少年社会の悪流行病」と題した一文を『中学世界』に載せ、その冒頭でこのように述べる。「近時新聞雑誌の上に現はれたる所によりて今の少年社会の風気を察するに、其の最も著しきもの、一は慷慨熱なり。吾人深く是を憂とす。」(高山 1899c、1頁)

慷慨熱の「慷慨」とは、世の中の悪しき風潮や不正などを怒り嘆くことである。高山も「吾人は慷慨其物を悪し、と謂ふに非ず」(同上)と述べるように、慷慨それ自体は悪いことではなく、むしろ一定の見識を持つ人物による慷慨は社会にとって必要でさえある。しかし、世間を知らない青少年に慷慨はまだ無理だと高山は言う。

今の少年口を開けば輒ち言ふ、人は墮落せり、世は腐敗せり、名教地に墜ち、彝倫蕩然たり、一大革新無かるべからずと。壮なる哉言や。吾人決して現世の腐敗せる事実を非認せざるべし、唯問はむ、是の如き壮語を為す所の少年諸子は今の人、今の世の如何に腐敗せるかを知れりや。中等教育時代にある諸子は、其の未熟の学識と貧少の閱歴とを挾で、是の活人世、活社会を洞観し得たりと謂ふ乎。諸子よ、吾人の直言を許せ、吾人は爾か信ずる能はざる也。夫れ既に人を知らず、世を識らず、而て其の腐敗墮落を慷慨すと称す。吾人は其言徒に壮にして、其事甚だ空若たらむを恐るゝ也。」(同上)

慷慨熱に浮かされた青少年の驕りを高山はこう諷めている。つまり、言うことは立派に見えるが、中身が空っぽだということである。このような浅薄かつ短絡的な言動が後を絶たない要因として、高山は印刷技術の発達と活字文化の隆盛を指摘する^{註15}。1901年6月に博文館から出版した自著『文芸評論』収録の「小年の文学熱」の中で高山は次のように述べている。「今は印刷の便利なる世とて、今夕筆を走らして利口げな事を書けば、明日は麗々たる文字となりて天下に頒布せらる。知らざるものは見て如何にもエラサウに想像すれど、多くは無一物なる白面書生が無責任なるざれ書きに過ぎざるぞかし。少年客気の際にはこのエラサウなる所ヒドク気に入るものにて、虚名を儕輩の間に馳せて一ツ廉の文豪になり済ます様は、笑止千万と申す外無し。我邦の文壇如何に幼稚なればとて、まさかにかゝる大文豪の鞭撻にて左右せらるべしとも思はれず、大文豪自らにとりても、即がて目覚むるまでの夢一場に過ぎざれば、他日の侮を残すのみにて、其の身の為には露なるまじき也。知りもせぬ西洋詩人の名前など人並に振廻はすさまは殊の外危険し。」(高山 1901b、361-362頁)

世間のことも西洋詩人の名前も知らない青少年が偉そうに大文豪を演じている様子を厳しく批判していることは明らかであろう。高山によれば、こうした青少年の発言は「名は慷慨と称し、義憤と云ふと雖も、実は不平のみ」(高山 1899c、2頁)であり、青少年の健全な発育という観点から見ても望ましくはないという。「慷慨を以て高しとするの風一度び少年の脳裏に浸潤せむか、彼れの進取の気質は是れが為めに累はさるゝ事なかるべき乎。彼れは是によりて知らず識らず世を厭ひ、人を憎む一種憂鬱の習性を馴致すること無かるべき乎、凡そ少年の病に於て最も恐るべきは、快闊楽天の気質を失ふにあり、是の気質を失はゞ、是れ進歩無き也、希望無き也、少年は精神的に死亡せる也。少年諸子、並に其師友父兄は、是の似而非慷慨の悪流行病に対して深く警戒する所無かるべからず。」(前掲書、3頁)

一方で、生意気な青少年に対して容赦ない批判を浴びせつつ、他方では、これ以上青少年に悪影響が及ばないよう「是の似而非慷慨の悪流行病に対して深く警戒する」という教育的配慮を要請したのである。

(3) 青少年教育観に基づく高山の坪内批判

青少年に対する教育的配慮に関連して言えば、高山の青少年批判の背後にあったのはまさに少年時代=修養時代という確固たる青少年教育観にほかならなかった。「少年社会の悪流行病」の中で高山は次のように述べる。

少年の時代は最も純粹なる意味に於ての修養時代なり。彼れは尚ほ未だ事理に通ぜず、人

世を解せず、世故の閱歴無し、彼れは独立して生活し得るものに非ず、独立の生活を得むが為の準備期に在るもの也。彼は法律上に於ても、道德上に於ても、尚ほ未だ完全なる人権と責任とを具備するに到らず、凡ての点に於て少年なり。彼れの務むべき事は学識を修むるにあり、品性を養ふにあり、人生世間の種々相に通じて、實際の知見を開拓するにあり。(前掲書、2頁)

また「小年の文学熱」の冒頭においても次のように述べている。「少年の手に成れる文学雑誌は、今日少からず発行せられつゝあることなるが、こは寧ろ憂ふべき事也。少年は修養の時代なり、真に其の本分を自覚せるものならむには、是の修養の為に日も尚ほ足らずとすべし、何の違ありてか文壇の事に関り知るを得むや。」(高山 1901b、361頁)——高山に言わせれば、知識的にも法律的にも道德的にも未成熟な青少年にとって本当に必要なのは、似而非慷慨に現を抜かすことではなく、地道に学識を修め、自らの品性を養うことである。にもかかわらず、今の青少年はこの「修養」という重要課題を忘れ、文学雑誌を読んでは生意気なことを言っているというのである。

興味深いのは、高山の批判の矛先が、慷慨熱に浮かされている生意気な青少年にだけでなく、こうした悪流行病を助長する文壇の年長世代にも向けられていることである。たとえば「少年読書の法如何」の中で高山は、「夫の書を読むこと終生、而して一事の国家社会に尽す所以を知らず、尚ほ自ら高ぶり傲然他を瞰下して俗人と為すもの、今の学究先生に乏しからず」(高山 1898a、19-20頁)とした上で、「吾人は少年諸子が是の如き学究先生の所為に倣はざらむことを切望する者なり」(前掲書、20頁)と述べ、高慢な学究先生の悪影響が青少年に及ばないよう注意喚起する。

また「少年社会の悪流行病」においても、「憂ふべきは是の如き似而非慷慨家の今の世に少からざる事也」とした上で、「而して更に最も憂ふべきは、純潔無垢なる少年諸子が是の如き似而非慷慨家に私淑し、其の無意義なる口調を学で自ら喜ぶもの、尠からざる事也」と述べ、修養に勤しむという青少年の本分を忘れないよう警告する(高山 1899c、2頁)。青少年に悪影響を及ぼす存在としてここで取り上げられている「学究先生」や「似而非慷慨家」が具体的に誰を指すのかについての言及は避けられているが、これまでの考察を踏まえれば、ここに坪内の名前を代入しても十分に説明はつくだろう。

さらに「西郷南洲の銅像」においては次のように述べる。「今の教育殊に中等教育は、小理屈家小野心家の養成所なり。彼等多くは学校を出で、忠実に父祖の遺業を継紹する能はず、争うて高等専門の教育に趨る。中道にして挫折せざるもの少なし。是れ豈国家の大患にあらず

や。教育者たるもの亦一顧すべき也。」(高山 1898c、8頁)——今の中等教育機関は能力に乏しい生意気な青少年を迎え入れ、小理屈家や小野心家を養成するだけの役割しか果たせていないという国家の実情を憂慮する文章だが、坪内が早稲田中学で教頭を務めていた事実を踏まえれば、この文章は坪内批判とも読めるだろう。高山の目には、坪内が勤める早稲田中学こそ「小理屈家小野心家の養成所」と映ったのかもしれない。

以上に確認したような美的生活論争の前史、とりわけ高山の青少年教育観を踏まえるなら、美的生活論争の見え方も自ずと変わってこよう。読書は青少年の自己修養の可能性を秘めている点において教育的意義を有しているにもかかわらず、今の青少年は坪内に代表される似而非慷慨家の本に影響されているため、根拠無き自己効力感から生意気な発言を繰り返している。しかし、青少年の時期というのは本来修養時代であるべきだ。——高山はまさに教育的な観点から坪内を批判していたのである。

6. 美的生活論争の再解釈

美的生活論争という名称のルーツでもある高山の「美的生活を論ず」は、1901年8月刊行の『太陽』誌上に発表された論文だが、周知のとおり、この論文それ自体にニーチェの名前は一切登場しない。にもかかわらず、美的生活論争がニーチェ論争と捉えられてきたのは、1901年9月、高山の友人である登張竹風が『帝国文学』誌上に「美的生活論とニイチェ」を発表し、高山の美的生活論がニーチェ思想に根拠を有していると主張したこと、また、高山も美的生活論に先立つ1901年1月に「文明批評家としての文学者(本邦文壇の側面評)」を発表し、その中でニーチェについて詳述していたことに、その根拠を求めることができる。

本稿は従来もっぱらニーチェ論争と捉えられてきた美的生活論争をいわば高山と坪内の「教育的対決」として再解釈する試みであるため、本節ではまず(1)高山がどのような時期にどのような経緯でニーチェと出会ったのかを確認し、(2)従来ニーチェ論と捉えられてきた「文明批評家としての文学者(本邦文壇の側面評)」における高山の真の意図を探る。次に(3)美的生活論争のもう一つの極である坪内の「馬骨人言」にも目を向け、高山と坪内の対立構図を再確認するとともに、(4)坪内の青少年教育観を読み解き、最後に(5)美的生活論争の教育的意味を検討する。

(1) 高山とニーチェとの出会い

高山とニーチェとの出会いについて、井上哲次郎は次のように証言している。

余は明治三十年に二度目の洋行をした。巴里に東洋学会が開かれるので富井博士と兩人で之に出席した。余が出発の際は高山氏は姉崎氏と共に愉快さうに横浜迄見送りに来たのである。所が余は富井博士に先つて其年の暮に帰朝した。其翌年の一月であつたと思ふが、富士見軒に知友を二十人ばかり招待して、其席で欧州に於ける見聞談をしたのである。其中に初めてニーツェの事を話した。といふは、ニーツェは余が初めて留学生として独逸に行つた頃^{ママ}は（一八八四年―一八九〇年）は一向世間の注意を惹いて居らなかつた。余も、ニーツェの名は無論聞いては居つたけれども、特別に注意を払ふ程のこともなかつた。然るに二度目に洋行して巴里の東洋学会を終はつた後に独逸に這入つて見たところが、其時にはニーツェの評判が非常に高くなつて居つた。そこでニーツェの全集を買つて歸つて来た。さうして富士見軒に知友を招待した時にニーツェの事をいろ／＼話したのである。其席に高山氏、姉崎氏、大西氏などが居つた。其時はまだ外山博士も生存して居つたので来て居られた。加藤博士も無論来て居られた。そこでニーツェの事を高山氏も初めて聞いて、後日それが同氏に多大の影響を与へることになつたのである。余はニーツェの全集を買つて来たけれども、ニーツェは随分思想界に弊害を生ずる虞があると思つたからして成可くそれは鼓吹しなかつたのである。けれどもニーツェの事を真先に太陽に書いたのは姉崎氏であつた。余が富士見軒に於てニーツェを紹介した後の事である。（井上 1915、36-37頁）

井上の証言^{註16}を信じてよければ、高山は1898年1月、富士見軒で洋行帰りの井上からニーチェの話をはじめて聞いたということになるが、井上も言うように、真つ先にニーチェへの関心を抱いたのは姉崎潮風であつて、高山はすぐにはニーチェに飛びついていない。これは、そもそも高山が『太陽』の文芸欄主筆として多忙を極めておりニーチェを読む暇がなかつたこと、また京都帝国大学文科大学美学担当教授としての招聘が内定し、赴任に先立って1900年9月から3年間ヨーロッパ留学に行くことが決定していたため、慌ててニーチェを読む必要がなかつたことなど、さまざまな要因が考えられる。いずれにせよ、前途洋々たる当時の高山にとってニーチェ思想のプライオリティはそこまで高くはなかつたと言えよう。

ところが、そんな高山に残酷な転機が訪れる。ヨーロッパ留学直前の1900年8月、高山は突然咯血し、長期療養のため留学が中止となつてしまったのである。高山がニーチェを読み始めたのはまさにこの時期である。療養というかたちで時間的余裕を得たというのもひとつの理由ではあろうが、病気で夢が絶たれてしまったとき、高山にとって生きる支えとなつたのがニーチェ思想にほかならなかつた^{註17}。高山樗牛研究において通説となつてゐる国家主義から個人

主義への転換はまさにこの時期に求められるし、美的生活論争の種火のような役割を果たす1901年1月発表の「文明批評家としての文学者（本邦文壇の側面評）」の執筆もまさにこの時期に行われたのである^{註18}。

（2）「文明批評家としての文学者（本邦文壇の側面評）」の再解釈

1901年1月の論文「文明批評家としての文学者（本邦文壇の側面評）」は従来もっぱら高山のニーチェ論として位置づけられ、美的生活論争＝ニーチェ論争という見方の土台となってきた^{註19}。実際、高山は「蓋し彼れは哲学者と謂はむよりは寧ろ大なる詩人也、而して詩人として大いなる所以は、実に彼が大いなる文明批評家^{●●●●●}Kulturkritikerたる所に存す」（高山 1901a、17-18頁）と述べ、「是に於て吾人は文明批評家としてのニーツェ^{クルツールクリチケル}が偉大なる人格を歎美するを禁ずる能はず」（前掲書、18頁）とニーチェを高く評価する。

この文章だけを見るとニーチェに対する高山の傾倒ぶりが伝わってくるようだが、杉田も指摘しているとおり、「文明批評家としての文学者」で展開されるニーチェ論はツィーグラの抄訳に過ぎず、高山自身の見解や意図を期待できるようなものとは言いがたい^{註20}。つまり、ニーチェを文明批評家として捉える点に高山のニーチェ理解の特質を認めることは可能だが、それは高山のオリジナルではなく、いわばツィーグラ解釈の追認でしかないのである。このように考えれば、本論文の執筆意図や高山のメッセージはむしろタイトルでは括弧内に収められた（本邦文壇の側面評）の方に込められているとは言えないだろうか。

このような視点に基づいて本論文を読み解いてみると、ニーチェへの高い評価と同等、あるいはそれ以上に本邦文壇への批判が用意されていることに気づく。

たとえば、文学者を自称する人たちがそもそも文学の何たるかを理解していない点をこう批判している。「彼等の多くは社会を知らず、国家を解せず、況してや十九世紀の世界文明をや。彼等の多くは唯一代の文明も風馬牛なる其の豆大の眼孔に映じたる貧少なる閱歴を糊塗し輒ち呼で詩歌と云ひ、小説と云ひ、我こそは文学者なりと称す、抑々彼等の多くは文学なるものを如何なる物と心得居るにや、抱腹絶倒せざらむと欲するも豈に得べけむや。」（前掲書、20頁）

また、そもそも文学の世界に足を踏み入れた動機や経緯にも批判的視線を向ける。「吾人は茲に顧みて我邦文学者の多くが、気節なく、徳操なく、飄々片々として時好に投ぜざらむことを是れ怖るゝの弱志薄行を遺憾とせざるを得ず。依て以て虚名を得、銭利を貪るの外、彼等に於て毫も著作せざるべからざるの必要無し、彼等は唯官吏たらず、商人たらざる代りに、仮りに文学者となれるのみ。」（前掲書、21頁）——要するに、本邦の文学者は確固たる使命感も持たず、ただ虚栄心や金儲けのために文筆活動をしているというのである。

高山は結論部で「吾人は文明批評家としての文学者を論じて囚らずも罪を我邦小説家に得るに到りぬ」（前掲書、24頁）と述べる。「囚らずも」という言葉を字義通りに解釈すれば、本邦文壇に対する批判は全く意図していなかったということであるが、おそらくこれは文学界の大御所を批判するために用意した計画的エクスキューズと見るべきであろう。

「吾人は今の我邦文学者の多くが、是の如き憐むべき状態に存在するにも拘らず、高く自ら標置して大文豪、大小説家を気取るの癡態を傍観するに忍びず、夫の丙丁童子に擁せられて先生を以て自ら居る者の如きは、真に人をして絶倒せしむ。」（同上）——高山はこのように述べているが、子どもたちに「先生」と呼ばれている「大文豪」に坪内も数え入れられるとすれば、坪内は高山によって痛烈に批判されていることになる。こうして高山は、坪内逍遙に代表される旧世代の文学者たちにこう改心を要求するのである。「吾人をして今の文壇の為に計らしめむか、吾人は何よりも先に本邦文学者が文学に対する覚悟を一新せむことを希はざるべからず。彼等が戯作者氣質を擺脫せざる限りは、一切の助言も水泡のみ。吾人は是の目的に対する一方法として切に欧米輓近の詩人小説家の傑作を翫味することを勧告せむ。文明批評家としての文学者が、如何の修養、如何の品性を須要とすべきかは、特に彼等の注意を要すべし。」（同上）

以上に見たように、「文明批評家としての文学者」は、ニーチェ論というオブラートに包んだ日本文壇批判であり、当然のことながら文壇の大御所的存在である坪内逍遙もその批判の射程に収まっていたと考えられる。とりわけ興味深いのは、高山の坪内批判が「修養」をめぐるてなされている点であろう。すなわち高山は「今の文学者には修養の念慮無し」（前掲書、22頁）と述べた上で、「若し彼等にして修養を怠らずと謂はゞ、是れ疑も無く修養の道を誤れる也、即ち吾人の所謂修養に非ざる也」（同上）として「修養」に対する本邦文壇の無理解をはっきりと指摘しており、その意味で高山の「文明批評家としての文学者（本邦文壇の側面評）」は青少年教育という観点からなされた坪内批判であると解釈できるのである。

（3）高山と坪内の直接対決

「文明批評家としての文学者（本邦文壇の側面評）」から半年余り過ぎた1901年8月、高山は「美的生活を論ず」を発表する。「美的生活を論ず」では、たとえば「人性本然の要求を満足せしむるもの、茲に是を美的生活と云ふ」（高山 1901c、34頁）といった具合に、ニーチェの生の哲学にも通ずる高山の持論が展開されている。それは病床に伏しながら、健康な身体や逞しい本能を憧憬する高山自身の生の哲学にほかならなかった。

これが後にニーチェ礼賛と受け取られ、ニーチェ論争としての美的生活論争が巻き起こるの

だが、すでに指摘したように、そもそも美的生活論にはニーチェへの直接的な言及はない。むしろ美的生活論にしばしば登場するのは「道学先生」の名で呼ばれる坪内逍遙の方であり、その意味で「美的生活を論ず」にはニーチェ論よりもむしろ坪内批判の要素が多く含まれていると見るべきである。

「道学先生」への言及はたとえば次のような感じである。「^{道徳}と^{理性}とは、人類を下等動物より区別する所の重なる^{特質}也。然れども吾人に^{最大の幸福}を与へ得るものは是の両者に非ずして^{実は本能}なることを知らざるべからず。蓋し人類は其の本然の性質に於て下等動物と多く異なるものに非ず。世の^{道学先生}の説くところ、^{理義}如何に高く、^{言辞}如何に妙なるも、若し^{彼等}をして^{其の中心の所信}を赤裸々に告白するの^{勇氣}だにあらしめむか、^{必ず}や^{人生の至樂}は^{畢竟}性欲の満足に存することを認むるならむ。」(前掲書、34-35頁)

青少年の倫理教育に熱心な道学先生であっても、人間である以上、結局は本能満足への欲求からは逃れられないはずだ——このような趣旨の発言を受け、坪内もさすがに腹を立てたのであろう。こうして坪内は、かつて高山の懸賞小説「滝口入道」を掲載した『読売新聞』紙上に戯作「馬骨人言」を発表することになる。なお、連載期間は1901年10月12日～11月7日だが、本稿は1903年刊行の『通俗倫理談』収録版に依拠する。

もっとも、坪内が「馬骨人言」の連載を開始する前には、一方で坪内派に属する早稲田大学の長谷川天溪が「美的生活とは何ぞや」という反駁を高山に突きつけ、他方で高山派に属する登張竹風が横やりを入れるかたちで「美的生活論とニイチェ」を発表し、事態はすでにニーチェ論争の様相を呈していたため、「馬骨人言」も表向きはニーチェ主義批判を軸に構成されている。

坪内がまず批判するのは、「御本尊の流行仏のニイチェ大師さま」(坪内 1903、396頁)、すなわちニーチェ思想そのものである。というのも、坪内の見るところによれば、ニーチェ思想が大流行しているように見えるのは「^{時勢}といふ本舞台一ぱいの^{大道具}の^{装置}の^{所為}」であって、「^{勇士}のやうに見えるニイチェは其の^{実偶人}」でしかないからである(前掲書、416頁)。「蓋しニイチェをしてニイチェたらしむる所以の根幹は、其の極端の個人主義即ち絶対の利己主義即ち絶対の差別主義で、其の他は^{枝葉花実}たるに過ぎぬ、故に若し此の根幹に^{逆俗}の実証が無く、否、却つて^{循俗}の証があれば彼れは^{反動}の健児どころか、寧ろ当代の^{寵兒}、^{流行兒}と言つても先づは異論のあるまじき筈だ。」(前掲書、417頁)——坪内はニーチェ思想を極端な個人主義・利己主義・差別主義と捉え、これこそがニーチェ主義流行の決定的要因と見た。坪内に言わせれば、個人主義を強調するニーチェはただの「^{我儘}つ子」であり、「^{悪時代}精神の^{権化}」であって、決して高山が言うような「^{文明}の^{真批評家}」などではないのである(前掲書、426頁)。

だとすれば、当然そのようなニーチェ思想を担ぐニーチェ主義者たちも非難されるべきであ

ろう。こうして坪内はニーチェ思想のみならずニーチェ主義者にも批判を矛先を向ける。「ニーチェは循俗の蕩児、循流の死魚だと知らぬか。心附いて尚ほニーチェヤニズムを反動といふか。然らば、ニーチェヤニズムは兼愛主義若しくは協同主義か。抑々また私欲一辺が真個に人間の踐むべき道か。」(前掲書、425頁)——坪内に言わせるなら、ニーチェ思想は反動という名の文明批評などではなく、「有害無益の、ほんの暫時の破壊力で、たかゞ機械的の壯烈たるに過ぎぬもの」であるにもかかわらず、「それを見て喝采の声を揚げる手合」は「言語道断の残忍、自分勝手、向ふ河岸^{がし}の大火事を偶然が我れに供給する目放楽^{チャンス}とばかり心得る輩^{めほうらく}」でしかない(前掲書、397頁)。

「畢竟は俊才たちの思ひつき、ニーチェ坊の循蔭で勝手に大気焔を吐かうがためだ。若い衆が発起の臨時祭と同格で、飲みたさ、踊りたさが主で、知らぬが仏の神さまはほんのダシ、遊びがすめば、お精霊さま同様、責任も何もかも一切しょはせて西の海へサラリ流さうの寸法なら、尚以て妙案の。」(前掲書、465頁)——坪内はこのように述べ、美的生活論以降に顕著となったニーチェ主義流行の浅薄さや無意味さを皮肉たっぷりに嗤う。坪内にとっては、ニーチェを担いで馬鹿騒ぎを煽動する高山も、奇抜な発想や流行に飛びつく軽率なニーチェ主義者も、ともに許せなかったのである。

一方、高山からすれば、坪内の「馬骨人言」は到底許せるものではなかった。高山は「馬骨人言」連載中の1901年11月5日、『太陽』誌上に「ニーチェの批難者」という一文を載せ、齒に衣着せぬ直接的な坪内批判を展開する。「世に天才を解し得ずして是を批評するほど笑ふべきことは無い。今のニーチェの批難者の如きは大抵是の類だ。」(高山 1901d、50頁)——まず冒頭で高山はこのように述べ、ニーチェの批難者一般を一笑に附すが、坪内への口撃はより辛辣である。

たとえば高山は次のように述べる。「読売の馬骨先生は、やれ個人主義が如何だの、やれ歴史的發達が如何だの、やれアナクロニズムがあるの、やれ盲目反動だのと、是迄の俗学者の言ひ腐らした事を珍らしげに陳べて居るが、是れでニーチェが解つた積りで御自分は居らるゝのか。」(同上)——つまり、自らの不勉強を棚に上げ「エラサウ」にニーチェを批難する「馬骨先生」の無知を問ひ質すのである。そして、「斯むな無用の弁を弄する暇があるならば、ニーチェの妹さんの書いた伝記や、ザラツストラでも熟読なさるゝが御為だよ」(同上)と、上から目線で応酬する。

坪内も負けてはいない。1902年4月、『中央公論』掲載の「我が現思想界の通弊」の中で「写実主義や、理想主義や、ローマンチズムや、ニーチェヤニズムや、反詰せらるれば其の定義に狼狽するの人々にして頻りに之れを鼓吹することあり」(坪内 1902、9頁)と述べ、

反駁に対して十分な回答ができないにもかかわらず軽率無思慮に危険思想を鼓吹する高山らを批判する。

ニーチェ思想をめぐっての賛否両論が飛び交っているわけなので、これをニーチェ論争と言うことは可能であろう。ただ、本稿のこれまでの考察を踏まえれば、両者の論争は例のア priori な対立構図を背景にしつつ、ある別の観点からなされたと見るべきである。その別の観点こそ、青少年教育にほかならない。

(4) 青少年への悪影響を憂慮する坪内

高山の「ニイチェの批難者」が発表された2日後に「馬骨人言」は最終回を迎えるが、その中で坪内は次のように挨拶をする。「やれ、長いことお邪魔さました。ニイチェ歓迎の真理由は俊才たちのほんの一時の悪戯いたづらとこときまれば先づ安心でござるによつて、一先退座いたしませうが、序ゆゑに一言申添へたいは、今の諸雑誌、新聞紙に筆採らるゝ英才方、学者方へお頼み、馬骨なども弟があり、甥があり、子供らがござつて、或は高等小学、或は中学の生意気盛り、始末におへませぬ。親のいふことはきかず、師匠のいふことは忘れますが、皆さまがたの御名文だけは暗誦そらおぼえにまでいたしましての信仰、熟字、成語、訳語、句格、語格、論旨、取別けて修身処世をしへの訓など、いづれも諸君のお庇で、習ひおぼえますることで、有難い仕合にぞんじます。此の上とも何分の御指導、御感化のほどを単に願ひあげます。」(坪内 1903、466頁)

ニーチェ主義の流行がじつは浅薄な受容形態による一過性の現象に過ぎないことを改めて確認した上で、青少年に対する新聞雑誌等の影響力の大きさを指摘しているわけだが、坪内が気に掛けていたのは、ここに挙げてあるようなプラスの教育的影響ではなく、マイナスの影響であった。

近ごろに至りまして、宅の小僧共薄べらな雑誌やうのものをこしらへ、頻りに兄弟喧嘩、親戚喧嘩しんみの悪口などを書散らし、時としては親共、師匠の蔭言までも書綴つて、近隣を見せあるきまするによつて、さることはすまじきと誡めますれば、イヤこれは侃々諤々の直言だの、党同伐異の弊風を破るのだなぞ申して要領を得ませぬ。イヤ親身の間の直言ならば、先づ内々で面めんと向つて言やれ、真先に世間に吹聴マママベすきでないぞ。ましてや人前で人身攻撃までしておきながら恬然として交際し、剩へ物ほしうなつて媚あまへるなどは卑劣な所ふるまひ為だぞと誨へましても、「それでもこれは先生がたが書く雑誌の真似だ」なぞと親の手にはのりませぬ。よもやとは存しきたりじますが、さるお慣例もござることか、或はそれが取り

も直さず徒然のお手すさび、ほんの洒落引のニーチェ節の一曲で、もござりまするか、伺ひおきまするでござりまする。さよなら。(前掲書、466-467頁)

ここには、新聞雑誌の影響を受け無責任な誹謗中傷ごっこに興じる青少年の姿が描かれていると言えよう。このような青少年が実在したか否かは別として、坪内がニーチェ主義者らの文章の影響力に脅威を感じていたことは間違いない。

坪内は1903年刊行の自著『通俗倫理談』に「馬骨人言」に序す」という一文を載せ、その執筆意図についてこう述べる。「予が「馬骨人言」を艸するに至りし動機は一ならず、中に就いて第一は当時の無責任なる文学雑誌の言論の世の年少者流に於ける悪感化を憂ふるに在りき。」(前掲書、382頁)——こう明言されているように、坪内が「馬骨人言」を連載した最大の理由は、青少年に対する文学雑誌の悪影響であった。

坪内はこう続ける。「今の青年詞壇は学識に貧なること甚し。彼等は影におのゝき、響に驚き、虚誉を追ひ、虚名を崇拜す。剩へ自ら味ふに及ばずして他に之れを薦め、己れ未だ解する及ばずして既に妄に之れを鼓吹す。而してまた此の受売を受売し、此の空反響に反響して虚に吠ゆるの徒將た少からずと伝へき。思へらく、今にして一箭を下さゞらんか此の種子皆雑草となりて蔓延せんと。予がニイチェヤニズムを罵倒せし意は主として此にあり、世の自ら欺ける輩の書の夢を驚かすにありき、要するにニイチェは一犠牲のみ。」(同上)

坪内らの影響で青少年が慷慨熱に浮かされていることを憂慮した高山と同様、坪内も、高山のようなニーチェ主義者の影響によって青少年の学識がますます貧相になっていくことを嘆く。「要するにニイチェは一犠牲のみ」という言葉が象徴するように、ニーチェはある種のスケープゴートであって、「馬骨人言」における坪内の本当の標的は、高山に代表される青年雑誌記者の方であり、その批判のポイントは青少年教育だったのである。

(5) 教育的対決としての美的生活論争

ここで想起したいのは、坪内が高山よりもずっと長く教鞭を執っていた事実である。たとえば坪内は1897年2月、雑誌『教育壇』に「文学の体用を論じて其の年少者に於ける影響に及ぶ」と題した一文を寄稿し、「アルコール又はニコチンが未成熟なる彼等の諸機関に及ぼす大毒は医師の一般に認むる所」(坪内 1897b、70頁)と述べた上で、「予は文学を論ずる時に於ては常に詩歌の独立を主張し其の出世間的なる本性を論弁すれども一たび世間的立脚地に立ちて教育の側面より文学を論ずる時にはあくまでも文学の危険なるを説かざるを得ず」(同上)と、文学者ではなく教育者の立場から青少年に対する文学の危険性について警鐘を鳴らす。文学を

本職としていた坪内であるが、有害な危険文学を青少年に与えてしまうことには教育的見地から反対していたのである。

また「馬骨人言」の中で坪内は次のように述べている。「芸術専門家は常に理想界に住するもよからうし、詩人、小説家は始終空想に耽るもよからう、が普通国民の普通教育は「常識」と「実用」とに立脚せずして何としようぞ。同型主義や形式教育の事はおのづから別だから志ばらく措く、普通教育の主義としては彼の天才養成主義などいふものは根本的に邪曲だ。小ニイチェ、小ルーソー、小パイロン、小ショーペンハウエルほど古往今来、有害にして無益なものはない。一人、二人の豪傑を作らん為に（それすらも不確実だ！）幾多大切な「人の子」を不具とすることを敢てする又は敢てせんことを主張する無思慮な、無責任な僻論者等こそ不埒至極な者だぞ。」（坪内 1903、427-428頁）

ここには、“教育者”坪内の信念がはっきりと表白されている^{註21}。差別を容認するような天才養成主義としてのニーチェ思想をそのまま普通教育に援用することは不可能のはずなのに、「小ニイチェ」たるニーチェ主義者は無責任に天才養成主義を鼓吹している。坪内の批判点はこのようなものだが、注目すべきは、その批判があくまでもニーチェ主義者に向かっている点である。

実際、坪内は「ニイチェが唱へたことに幾多時弊に適中した、参酌若しくは同感すべき觀察即ち真理素の混じてゐることは無論だ」（前掲書、413頁）と述べ、ニーチェ思想そのものを全否定してはいない。ただ、同時に「それを知るには決してニイチェ坊を俟たぬことだ」とも付言し、ニーチェ主義者の口を通して語られるニーチェ思想には耳を貸すべきではないと主張する。

興味深いのは、坪内がドイツの新教育運動に言及し、「今日独逸の新教育主義の如きは、畢竟するにそれを救はんための折衷案、調和策たるに外ならぬ」（同上）と述べていることである。坪内に言わせるなら、ドイツの新教育運動は、いわば教育学的に許容できるレベルにまでニーチェ思想を無毒化した、ニーチェ思想と教育学との調和的折衷案にほかならない。逆の見方をすれば、日本のニーチェ主義者は、教育学的意義を潜在的に内包しているニーチェ思想を、青少年にとって有害無益の危険思想のまま流通させてしまっているということであろう。坪内は、ニーチェ思想が教育学的に馴化されつつあるドイツ教育界を横目に、日本におけるニーチェ主義流行の非教育学的状態を憂慮したのかもしれない。

いずれにせよ、坪内は青少年のあいだで流行しつつあるニーチェ思想を教育的観点から危険視し、有害無益なその思想を無責任に鼓吹する高山らニーチェ主義者を“教育者”の立場から痛烈に批判したのである。

それに対して高山は、1901年11月発行の『太陽』に掲載された「ニイチェの歎美者」の中で、

ニーチェ思想を必要以上に怖れる年長世代をこう揶揄する。「世にはニーチェの歎美者と謂へば、直に其の所説の実行者として驚怖する者があるが、まあ何と謂ふ馬鹿気た事であらう」（高山 1901e, 51頁）。高山に言わせれば、ニーチェの思想を字義通り解釈して実行に移すということはそもそもあり得ない。「ニーチェは前にも言へる如く、学者ではない。況して実践道徳家などでは猶更無い。彼れは生知の詩人だ。詩人として其の理想の崇高なること、其の想像の偉大なることは殆ど人心のはたらきの最高潮に達して居る。殊に十九世紀末の悪文明に育てられた吾々にとりて此の上もない靈性の慰藉と謂ふを憚らない。」（同上）

ニーチェは学者でも実践道徳家でもなく、あくまでも想像力豊かに理想を語る詩人であつて、そこにこそ現代人にとっての魅力が存している。「吾人が天才を歎美するのは、吾人の精神的生活を豊富にし、是によりて自ら慰め、自ら励み、かねて是の世に処する安立の地盤を求むるにあるのだ。俗学者流の生活する世界以上に於て、吾人の理想的天地を建設するの希望は、是等天才偉人の前蹤によりて少からず確かめられ、且励まざるゝのだ吾人は是の希望によりて吾人の人格を修養し、吾人の信仰を堅むるのだ。」（同上）——こうして高山は、ニーチェ思想が現代人の精神的生活を豊かにし、最終的には人格の修養につながることを力説する^{註22}。ニーチェ思想を教育的観点から危険視した坪内とは対照的に、高山は、ニーチェ読書による自己修養の可能性、すなわち青少年に対するニーチェ思想の教育的意義を積極的に評価しようとしたのである。

おわりに

本稿では、従来もっぱらニーチェ論争として捉えられてきた美的生活論争を高山樗牛と坪内逍遙の教育的対決として再解釈するために、美的生活論争の前史における両者の対立構図や教育への関心を丁寧に確認してきた。

誤解すべきでないのは、高山と坪内がニーチェをめぐって論争を開始したのではなく、もともと論争状態にあった両者のなかにたまたまニーチェが入ってきたということである。従来とかく強調されてきたニーチェという論点を相対化するためにも、このことを私たちは押さえておく必要がある。また、両者には教職経験があるというだけではなく、倫理教育や青少年読書をめぐってかなり具体的に互いの意見を主張していたことも見逃してはならない事実であろう。とくに1896～1903年と比較的長期にわたって教職を務めた坪内には、教育者としての自覚や誇りのようなものが感じられる^{註23}。これらの前史を踏まえてはじめて、美的生活論争の真の意味は解明されるのである。

杉田や西尾も指摘しているように、美的生活論争においては、極端な個人主義・差別主義・天才養成主義などと措定されたニーチェ思想をめぐって賛否両論が飛び交ったわけだが、本稿での考察を踏まえるなら、少なくとも高山と坪内については青少年教育という観点から論戦に参加していると言えるだろう。高山は、新時代を担う青少年にとって真の文学者たるニーチェの文明批評が教育的に有意義であると判断し、読書を通じた自己修養の可能性を力説した^{註24}。一方の坪内は、悪時代精神の権化たるニーチェ思想が青少年にとって有害無益だと判断し、青年雑誌等で無責任にこの種の思想を鼓吹するニーチェ主義者を徹底批判した。高山と坪内はニーチェへの賛否をめぐる攻防を繰り返しながら、実際には青少年教育について互いの意見を戦わせていたのである^{註25}。この意味で「ニーチェ」はある種の記号として機能していたに過ぎない^{註26}。

この両者の教育的対決は1902年12月、高山の死をもって強制終了させられる。そして、坪内も1903年に早稲田中学を辞し、教職から離れることになった。1903年2月に出版された『通俗倫理談』に「馬骨人言」に序すや「馬骨人言」が掲載されてはいるものの、坪内は少なくとも表向きは高山への口撃を控えるようになる。その坪内が再び高山について口を開いたのは、1915年出版の追想集『梶牛兄弟』においてであった。

「梶牛を憶ふ」と題した一文の冒頭で坪内はこう述べる。「故高山君と私との交際は、まだ半分が形式的の程度に止まつてゐた間に、同君は長逝せられたのでしたから、早稲田大学の教師室其他で屢々お目にかゝつてゐたにも係らず互ひに胸襟を開いて語りあつたといふ程の^マと^マこは幾んどなく、随つて互ひにまだ十分には相了解してゐなかつたやうに思ひます」(坪内 1915、190頁)。坪内はこのように高山との関係を想起しているが、これはまさに本稿が考察した両者のア priori な対立構図——埋められない溝／すれ違う議論——を裏書きする証言だと言えよう。

しかし、そのような中でも坪内と高山は論戦をやめなかった。それは両者に確固たる青少年教育観があったからである^{註27}。追想文の中で坪内は次のように述べている。「…ほしいまゝに人を魅し、人を感動さす文豪は今殊に稀なものです。然るに高山君の文章は、当時の文学を好む青年輩の随喜渴仰の的であつて、同君の或文章を「バイブル」のやうに精読してゐた者も少くなかつたといひます。而して其然る所以の原因は、主として同君の諸著に伴ふロマンチックな情熱とやさしい、いたましげな憧憬的な涙のうるほひであつたらうと私は思はれる。同君は我明治の西洋的ロマンチズムの最後の最も大なる代表者であつたやうに感ぜられます。」(坪内 1915、192-193頁)——高山は文学を好む青年の随喜渴仰の的であつた^{註28}。「逍遙が激昂するほど梶牛らを攻撃したのも、多くの梶牛追随者が存在したことにその一因があつた」(杉田 2010、25頁)と杉田も言うように、坪内は高山が青少年を煽動していると思つていたし、

だからこそ“教育者”の立場から“高山と不愉快な仲間たち”を批判し続けたのである。その意味で、美的生活論争はまさに高山樗牛と坪内逍遙による教育的対決だったと言える^{註29}。

【註】

註1 長尾によれば、「この「憧憬」という言葉は、ほかならぬ高山樗牛と、彼の親友である姉崎潮風が共同して編み出した造語であった」（長尾 2016、9頁）。

註2 本田によれば、「『小説神髓』がわが国の文壇の文明開化の幕開けをした名著であること以上に、坪内逍遙がその小説論によって直ちに小新聞の元祖、読売新聞の紙面にはじめて小説欄を創設したことの意味は大きい」（本田 1992、365頁）。

註3 当時の世代間ギャップについて渡辺は次のように言う。「江戸時代に生まれ、儒教によって中核的教養を形成し終えた後に「洋学」に接した世代は、「自我」によってそれほど深く傷つけられることはなかった。しかし、明治維新以後に生まれた世代は、明治五年の「学制」に基づいて設立されていた小学校に学び、まともに西洋文化に対面させられたのである。その意味で彼らは、日本近代化の影響をまともにくらった最初の世代であったと言える。」（渡辺 1978、192-193頁）

註4 歴史劇論争で坪内が「史劇に関する疑ひを再び太陽記者に質す」と題する一文を『早稲田文学』誌上に寄せ、「前々号に載せたる予が「史劇に就きての疑ひ」に対して『太陽』記者高山林次郎氏、去十月廿日の『太陽』紙上に、細密なる答解を与へられたり、然れども、憾むらくは、或は質問の法宜しきを得ざりしが為にや、予が疑團は尚聊も釈然たる能はず、故に疑問の辞をあらためて更に高山氏に質す所あらんとす」（坪内 1897e、28頁）と問い質せば、高山もいわゆる歴史画論争において「坪内先生に与へて三度び歴史画の本領を論ずる書」と題する一文を発表し、「坪内先生足下、歴史画論に関せる再度の高論を忝して、尚ほ其愚を改むる所以を知らず、三度び茲に卑見を陳べて罪を長者に重ねるの已むを得ざるに至りたるは、予の深く慚愧に勝えざる所也」（高山 1901b、278頁）と応戦するという具合で、両者は絶えず論争状態にあった。

註5 末木によれば、「井上はまた留学から帰国するとただちに、教育勅語を奉じる国家主義的徳道主義のイデオログとして積極的に活動し、教育勅語の公定解説書ともいべき『勅語衍義』を翌年刊行して、勅語を国民教化の柱とする国策的キャンペーンに乗り出した」（末木 2004、63-64頁）。

註6 「井上との黙約」と特徴づけられるような『新編倫理教科書』共著企画を通じて高山は、「井上の国家主義的倫理を消化・吸収し、日本主義の論理をおもむろに鍛え上げて行く」（前田 1973、43頁）。たとえば高山は、博文館が発行する雑誌『少年世界』に「愛国心」という一文を寄稿し、井上哲次郎譲りの君民一家思想を説く。「抑々愛国心は遠く国家の歴史に起原し、深く国民の情操に浸潤し、両々相依りて隔離すべからざるものなり。我大日本帝国は、開闢以来一定の国土に拠り、一系の皇室を戴き、悠悠三千年の間、国家の体制一縷も乱れず。其臣民は、悉く皇室の末裔にして、皇室は永く国民の宗家たり。」（高山 1898b、17頁）——このような見解に高山自身の真意がどれだけ反映されているかについては速断を許さないが、高山樗牛が青少年向け雑誌を媒体に国家主義的倫理教育のプロパガンダを展開していたことは事実である。前田はこのあたりの事情を次のように説明している。「樗牛は『太陽』の論壇を舞台に、井上の影武者ないしは留守居役をみごとに勤めおせた。むしろ忠実に演じすぎたといってもいい。」（前田 1973、44頁）

註7 原田によれば、「逍遙にあつては文芸活動は広義の教育であり、教化活動であり、すなわち人間の教養に寄与する活動にほかならないのであつた」（原田 1957、63頁）。

註8 『日本教育』賛成員及寄書家として、井上哲次郎（文科大学長）、嘉納治五郎（前普通学務局長）、谷本富（高等師範学校教授）、高山林次郎（太陽記者）、坪内雄蔵（専門学校講師）、久津見息忠（萬朝報記者）、沢柳政太郎（普通学務局長）らの名が挙げられている。

- 註9 表紙には「現今倫理教育方案の根本的誤謬」とある。なお冒頭で次のような断りが述べられる。「都合によりて、本誌第一号に掲げたる「方今の倫理教育につきて」といふ論文の続稿を本題の如くに改めたり、読者、之れを諒せよ。」(坪内 1899b、4頁)
- 註10 坪内はたとえば次のようにも述べている。「之れを要するに、此の種勅語直訳流の倫理教育は、一方に於ては、品性陶冶の活事業を死儀式的、機械的事業とならしむると同時に、他方に於ては、隠然、無意の間に勅語の神聖を冒しつゝあるの悪教育と評すべし。何となれば、年齢やうやうに十三四才、単純なる七情の区別すらも、未だ十分には会得しかぬる小学、中学の未成年に向ひて、結婚を説き、夫婦の和を説き、若しくは出産を説き、師父たるの任務を説くが如きは、無用なるはいふまでもなく、兼ねては、皇室に対し奉りて不敬千万の振舞なり。」(坪内 1899b、6頁)
- 註11 雨田は次のように述べる。「つまり高山は、一定の主義を堅持し、それを遂行せんとする強固な意志を有する理想的人物の育成法として「主義教育と人物感化」を重視していたのである。それは自発的能動的な自己形成を核とする教育法である。ここに高山の倫理教育の理想があり、国家教育構想の基本的な立場を見て取ることができる。」(雨田 2005、69頁)
- 註12 長尾は次のように指摘する。「高山樗牛というと、雑誌『太陽』の論説が重視されがちであるが、彼が『少年世界』や『中学世界』に寄せた記事のなかには、彼の時代認識や教育観が如実に現われた著作もあり、その価値は一概に低いとはいえない。」(長尾 2016、219-220頁)
- 註13 長尾は次のように述べる。「『中学世界』は、その名の通り現実の中学生を主要な読者層としていたが、非在学者である青年読者も中学程度という名目で周縁読者層として位置づけられていった。そのことが同誌の商業的成功に寄与したとの指摘もある。」(長尾 2016、220頁)
- 註14 高山は「偉人の像を建築する」際には「社会教育の着眼を欠くべからず」(高山 1898c、7頁)とも述べている。
- 註15 松原真は次のように指摘する。「小説隆盛ともなつて、書生達のあいだである現象が起こっていた。小説家になりたがるという現象である。小説の社会的地位が上昇している以上、これは当然の帰結と言えよう。」(松原真 2019、203頁)
- 註16 前田によればこの証言は、「井上が樗牛に与えた恩恵は細大漏らさず書き立てられているが、門下生としての樗牛への思いやりは微塵も感じられない奇怪な文章」(前田 1973、36頁)であるという。
- 註17 高山におけるニーチェ受容を林は次のように表現する。「もはや、樗牛はニーチェを他者として礼讃すると言うよりも、ニーチェを血肉化した樗牛自身の自己概念を絶対化していると言ったほうがふさわしいだろう。」(林 1998b、22頁)
- 註18 林はこのあたりの経緯をこう説明する。「留学を翌春に延期することを決めるとともに、ニーチェが八月二十五日に死去したことを知り、その<超人主義>への傾倒によって自らを発奮させるが如く、翌年=明治三四(一九〇一)年一月、前掲「文明批評家としての文学者(本邦文壇の側面評)」を発表して気炎をあげる。だが、三月には、胸部疾患治療の見込みなしという宣告のもと、最終的に洋行を断念。留学への夢を断たれたばかりでなく、自らの死を眼前に見ざるを得なくなってゆく。」(林 1998a、318頁)
- 註19 「高山樗牛の「文明批評家としての文学者」は、日本におけるニーチェ流行に大きな影響を与えたとされる文章である。」(修 2003、257頁)——修斌も言うように、高山の「文明批評家としての文学者」がニーチェブームの火付け役になったことは事実である。しかし、高山の意図は必ずしもニーチェ礼讃ではない。
- 註20 杉田は「樗牛の「文明批評家としての文学者」のニーチェ紹介と、チーグラの「十九世紀の精神的社会的思潮」のニーチェ紹介を照合すると、構成、内容が類似しているばかりでなく、前者には後者の直訳に近い文章も数多く見受けられ、ほとんど全文に相關々係を認めうる」(杉田 1966、23頁)と指摘している。
- 註21 坪内はヘルバルトにも詳しくあったようである。「…近世の彼の独逸のヘルバルトなどの説も、一面より見れば、矢張り此の知に重きを置いた説で、明確なる道徳の根本道念を与へれば、人間は悪を為すものでないと信じたものらしい。所謂ヘルバルトの徳育は主として五道念の涵養に基いてをるが、それは取りも直さず、

知育的である。知即ち観念の涵養によつて徳育は行はれると考へたと解してよろしい。」(坪内 1903、317-318頁)

註22 中村は次のように述べている。「樗牛は常に作品の奥に、その作品を書いた人間をとらえる。そして樗牛はニーチェに天才を觀た。個としての天才を觀たのである。」(中村 1994、125頁)

註23 原田は次のように述べている。「文学者としての逍遙の地位が、かえつて、あまりに高く確立していたからによるかと思われるが、当時日本の教育界は必ずしもこれを十分にわが畑のこととして受取つてはなかつたようである。しかし、それはたまたま日本の学校教育者の眼界のせまさと心域の窮屈さを暴露したものにほかならなかつた。逍遙自身はおそらくそのような自覚はもたなかつたであろうが、それらの活動は文学者としての活動という意識からでなく、むしろ社会教化者としての興味から試みられたものと見られるべきであろう。しかるに、教育界はあまりにこれを顧みず、さりとて文学界も逍遙の道楽ぐらゐに考えて真剣にこれを迎え容れなかつたかのようである。それにもかかわらず、逍遙にあつては、極めて真剣な活動であつたといわねばならない。」(原田 1957、68頁)

註24 石神は次のように述べる。「この20世紀初頭という時代、しだいに強まってきた画一的、統合的な社会を前にして、高山樗牛を初めとする多くの青年たちは、時代を変える力に憧れた。その憧憬は、はっきり自己を主張する勇気のある人間が出現することを待望する思いとなった。そしてこの思いのエネルギーは、当時次第に使われるようになってきた「個人主義」「個人主義者」という言葉に一挙に注入されたのである。そして、ここにニーチェが登場する。ニーチェとその思想は、ニーチェ自身を離れて、日本化されてしまうことになる。そして「ニーチェこそ個人主義のチャンピオンである、われわれは彼に大いに学ぶべきだ」という提唱となった。」(石神 2011、21頁)

註25 清松によれば、「ニーチェ思想もモルモン教も、在来の思想や宗教が混乱をきわめる中に投げこまれたからこそ、さらなる悪影響を与えかねないものとして並々ならぬ反発や警戒を招く」一方、「思想界の沈滞や混乱に一種の〈劇薬〉として作用する可能性が認められてもいる」(清松 2021、174頁)。本稿の文脈に当てはめるなら、坪内は青少年に及ぼす悪影響への懸念からニーチェ主義に反発し、高山は旧態依然とした社会を変革する起爆剤としてニーチェ思想に青少年教育の可能性を期待したと言えよう。

註26 金子はこう述べる。「逍遙の所説が全然道学先生的のものであつて、単にニーチェの皮相を云爲したに過ぎなかつたことは言ふまでもないが、樗牛等のニーチェに対する態度も要するに文学者的・感激的なものであつて、思潮史的・哲学的の基礎づけを欠いてゐたことも、見通がされてはならないであらう」(金子 1936、23頁)。

註27 坪内は1910年の時点でも青少年に対する小説の危険性を訴えている。「過去の小説は、高がラムネやサイダー程度の奢侈品空気銃程度の玩具に類してゐたから、少年に扱はせても安心であつたが、今はホイスキーやブランドーや阿片やピストル乃至至猟銃といふところ、娯楽用にもなるが凶器にもなるから危い。老婆心切の師父兄達が心配をして、諸子に彼此言ふのも道理であらうではないか。」(坪内 1910a、44頁)

註28 網澤もこう述べている。「彼の不思議な魔力ともいふべき情念の発露に、多情多感な若者の魂は、揺り動かされたのである。」(網澤 2019、1頁)

註29 坪内が批判したのは、青少年ではなく、また場合によってはニーチェ思想そのものでもなく、青少年を煽動するニーチェ主義者たる高山であつた。しかし高山は、従来考えられていたような青少年の煽動者ではなく、清松が明らかにしているとおおり、むしろ青年世代と対立関係にあつたと見るべきだろう(清松 2022)。結果として高山に煽動された青少年は存在したであろうが、少なくとも高山の側にそのような意図はなかつた。だからこそ高山は、自らの不勉強を棚に上げ世の中の墮落を憂うような生意気な青少年を牽制し、そのような慷慨熱に浮かされた青少年を量産する坪内のような似而非文学者を強く非難したのである。これらを踏まれば、青年世代に属する高山の方が青少年に厳しく、年長世代に属する坪内の方がむしろ青少年に優しくかつたとも言えよう。それは“教育者”としての自覚とも無縁ではないはずである。

【参考文献】

- 雨田英一 2001 「高山樗牛の国家教育の思想 (1) —教育と国家と宗教—」『東京女子大学紀要論集』第52巻第1号、97-117頁。
- 雨田英一 2002a 「高山樗牛の国家教育の思想 (2) —教育と国家と宗教—」『東京女子大学紀要論集』第52巻第2号、155-177頁。
- 雨田英一 2002b 「高山樗牛の国家教育の思想 (3) —教育と国家と宗教—」『東京女子大学紀要論集』第53巻第1号、107-129頁。
- 雨田英一 2003 「高山樗牛の国家教育の思想 (4) —教育と国家と宗教—」『東京女子大学紀要論集』第54巻第1号、57-80頁。
- 雨田英一 2004 「高山樗牛の国家教育の思想 (5) —教育と国家と宗教—」『東京女子大学紀要論集』第54巻第2号、81-106頁。
- 雨田英一 2005 「高山樗牛の国家教育の思想 (6) —教育と国家と宗教—」『東京女子大学紀要論集』第55巻第2号、55-79頁。
- 雨田英一 2006 「高山樗牛の国家教育の思想 (7) —教育と国家と宗教—」『東京女子大学紀要論集』第57巻第1号、47-73頁。
- 雨田英一 2007 「高山樗牛の国家教育の思想 (8) —教育と国家と宗教—」『東京女子大学紀要論集』第57巻第2号、51-74頁。
- 石神豊 2011 「歴史の中の個人主義—日本におけるニーチェ受容にみる— (その2)」『創価大学人文論集』第23号、1-26頁。
- 井上哲次郎 1902 『巽軒講話集』博文館。
- 井上哲次郎 1915 「大学時代の高山樗牛」太田資順編『樗牛兄弟』友朋館、32-46頁。
- 井上哲次郎・高山林次郎 1897a 『新編倫理教科書・巻一』金港堂。
- 井上哲次郎・高山林次郎 1897b 『新編倫理教科書・巻二』金港堂。
- 井上哲次郎・高山林次郎 1897c 『新編倫理教科書・首巻』金港堂。
- 井上哲次郎・高山林次郎 1897d 『新編倫理教科書・巻三』金港堂。
- 井上哲次郎・高山林次郎 1897e 『新編倫理教科書・巻四』金港堂。
- 金子馬治 1936 「ニイチエの復活」『理想』第62号、5-31頁。
- 木村洋 2012 「告白体の高山樗牛」熊本県立大学日本語日本文学会編『国文研究』第57号、1-16頁。
- 清松大 2021 「<劇業>としての外来思想と宗教—ニーチェイズムとモルモン教の奇妙な結合—」名古屋大学大学院人文学研究科附属超域文化社会センター編『JunCture：超域的日本文化研究』第12号、162-175頁。
- 清松大 2022 「戯画化されるニーチェ—「滑稽」と「諷刺」の模倣—」国際日本文化研究センター編『日本研究』第64集、91-106頁。
- 黒田俊太郎 2007 「『読売新聞』における<新聞小説>の編成過程—明治二〇年前後、逍遙の思考と意志の行方—」慶應義塾大学芸文学会編『藝文研究』第93号、1-28頁。
- 高坂正顕 1999 『明治思想史』(京都哲学撰書第1巻) 燈影舎。
- 櫻井待子・菅修一 1998 「坪内逍遙編纂小学校国語教科書『國語読本』の医学教材」日本医学図書館協会編『医学図書館』第45巻第4号、456-462頁。
- 修斌 2001 「明治日本におけるニーチェ受容に関する考察」新潟史学会編『新潟史学』第47号、1-19頁。
- 修斌 2003 「魯迅のニーチェ理解について—高山樗牛との比較検討を通じて—」『敬和学園大学研究紀要』第12号、255-273頁。
- 末木文美士 2004 『明治思想家論』(近代日本の思想・再考 I) トランスビュー。
- 杉田弘子 1966 「ニーチェ解釈の資料的研究—移入初期における日本文献と外国文献の関係—」東京大学国語国文学会編『国語と国文学』第43巻第5号、21-34頁。

- 杉田弘子 2006 「明治文壇を騒がせたニーチェイズム」『武蔵大学人文学会雑誌』第37巻第4号、87-108頁。
- 杉田弘子 2010 『漱石の『猫』とニーチェ—稀代の哲学者に震撼した近代日本の知性たち—』白水社。
- 高松敏男・西尾幹二編 1982 『日本人のニーチェ研究譜：ニーチェ全集別巻』白水社。
- 高山林次郎 1895a 「道徳の理想を論ず」『哲学雑誌』第10巻第100号、442-452頁。
- 高山林次郎 1895b 「道徳の理想を論ず（承前）」『哲学雑誌』第10巻第101号、512-525頁。
- 高山林次郎 1895c 「道徳の理想を論ず（承前）」『哲学雑誌』第10巻第102号、596-611頁。
- 高山林次郎 1895d 「道徳の理想を論ず（完結）」『哲学雑誌』第10巻第103号、690-698頁。
- 高山林次郎 1895e 「島国的哲学思想を排す」『哲学雑誌』第10巻第105号、884-895頁。
- 高山林次郎 1897 「明治の小説」『太陽（博文館創業十週年記念臨時増刊）』第3巻第12号、663-692頁。
- 高山林次郎 1898a 「少年読書の法如何」『少年世界』第4巻第1号、博文館、17-20頁。
- 高山林次郎 1898b 「愛国心」『少年世界』第4巻第3号、博文館、17-19頁。
- 高山林次郎 1898c 「西郷南洲の銅像」『中学世界』第1巻第3号、6-8頁。
- 高山林次郎 1899a 「新しき日本」『中学世界』第2巻第5号、1-3頁。
- 高山林次郎 1899b 「坪内雄蔵氏の倫理教育論を読む」『太陽』第5巻第11号、62-67頁。
- 高山林次郎 1899c 「少年社会の悪流行病」『中学世界』第2巻第27号、1-3頁。
- 高山林次郎 1901a 「文明批評家としての文学者（本邦文壇の側面評）」『太陽』第7巻第1号、17-25頁。
- 高山林次郎 1901b 『文芸評論』博文館。
- 高山林次郎（樗牛生）1901c 「美的生活を論ず」『太陽』第7巻第9号、33-39頁。
- 高山林次郎（樗牛生）1901d 「ニイチエの批難者」『太陽』第7巻第13号、50-51頁。
- 高山林次郎（樗牛生）1901e 「ニイチエの歎美者」『太陽』第7巻第13号、51頁。
- 網澤満昭 2019 「高山樗牛について」『近畿大学日本文化研究所紀要』第2号、1-12頁。
- 坪内逍遙 1897a 「作家と読書」『反省雑誌』第12年第1号、反省雑誌社、7-9頁。
- 坪内雄蔵 1897b 「文学の体用を論じて其の年少者に於ける影響に及ぶ」『教育壇』第1号、66-72頁。
- 坪内雄蔵 1897c 「中学用国文読本編纂法につきて私見を述ぶ」『教育壇』第3号、1-16頁。
- 坪内逍遙 1897d 「史劇に就きての疑ひ」『早稲田文学』第7年第1号、25-39頁。
- 坪内逍遙 1897e 「史劇に関する疑ひを再び太陽記者に質す」『早稲田文学』第7年第3号、28-38頁。
- 坪内逍遙 1898 「方今の小中学徳育及び其の弊」『早稲田文学』第7年第7号、24-35頁。
- 坪内雄蔵 1899a 「方今の倫理教育に就きて（再び）」『日本教育』第1号、3-7頁。
- 坪内雄蔵 1899b 「現行諸倫理教育方案の根本的誤謬」『日本教育』第4号、4-11頁。
- 坪内雄蔵 1899c 「現行倫理教案の根本的誤謬（承前）」『日本教育』第6号、1-9頁。
- 坪内雄蔵 1900a 「中学年齢の男女に小説を読ましむるの可否に関して教員某に答ふる書」『教育学術界』第1巻第3号、11-15頁。
- 坪内雄蔵 1900b 「中学年齢の男女に小説を読ましむるの可否に関して教員某に答ふる書」『教育学術界』第1巻第4号、3-6頁。
- 坪内逍遙 1902 「我が現思想界の通弊」『中央公論』第17年第4号、8-10頁。
- 坪内雄蔵 1903 『通俗倫理談』富山房。
- 坪内逍遙 1906a 「天才と文学志望者」『中央公論』第21年第1号、70頁。
- 坪内逍遙 1906b 「謡ひもの、文章につきて」『中央公論』第21年第1号、97-103頁。
- 坪内雄蔵 1910a 「現代小説を読む時の心得（上）」『学生』第1巻第5号、43-49頁。
- 坪内逍遙 1910b 「現代の小説を読む時の心得（下）」『学生』第1巻第7号、36-41頁。
- 坪内逍遙 1915 「樗牛を憶ふ」太田資順編『樗牛兄弟』友朋館、190-193頁。
- 坪内雄蔵 1922a 「教育上に於ける遊戯の職能」『学芸』第39巻第493号、2-11頁。
- 坪内逍遙 1922b 「少年教育上に於ける遊戯の職能」『学芸』第39巻第494号、42-52頁。

- 長尾宗典 2016 『<憧憬>の明治精神史—高山樗牛・姉崎潮風の時代—』ペリかん社。
- 中村憲治 1989 「樗牛とニーチェ (1)」文教大学編『文学部紀要』第3巻、52-75頁。
- 中村憲治 1994 「ニーチェから日蓮へ<樗牛の場合>—前篇—」文教大学編『文学部紀要』第8巻、117-127頁。
- 中村憲治 1999 「ニーチェから日蓮へ<樗牛の場合>—後篇—」文教大学編『文学部紀要』第12巻、63-75頁。
- 西尾幹二 1977 『ニーチェ 第一部』中央公論社。
- 西尾幹二 1982 「この九十年の展開」高松敏男・西尾幹二編『日本人のニーチェ研究譜：ニーチェ全集別巻』白水社、509-536頁。
- 橋本暢夫 1994 「中等国語教材史からみた坪内逍遙」全国大学国語教育学会編『国語科教育』第41号、147-154頁。
- 花澤哲文 2013 『高山樗牛—歴史をめぐる芸術と論争—』翰林書房。
- 花澤哲文 2016 「近代の体現者たる高山樗牛—研究史から浮かび上がる姿—」『日本近代文学』第94集、181-188頁。
- 花輪充・二本秀幸・竹本由美子・川合沙弥香 2012 「坪内逍遙が『家庭用児童劇』にて唱える三綱領「簡単」「純樸」「無邪気」の意味を探る—劇づくりと実演を通して—」『東京家政大学生生活科学研究報告』第35巻、27-31頁。
- 花輪充・二本秀幸・竹本由美子・川合沙弥香 2014 「坪内逍遙が主唱した「全人教育を目的とした劇的遊戯」の実証的検討—「家庭用児童劇」の劇化に伴う演出法の探究—」『東京家政大学博物館紀要』第19巻、27-51頁。
- 花輪充・山本直樹・鴨志田加奈・高谷温子 2016 「坪内逍遙が児童教育にもたらした偉業—家庭用児童劇の導入的意義 (1)—」『東京家政大学生生活科学研究報告』第39巻、1-7頁。
- 花輪充・山本直樹・鴨志田加奈・高谷温子・川合沙弥香 2017 「坪内逍遙が児童教育にもたらした偉業—家庭用児童劇の導入的意義 (2)—」『東京家政大学生生活科学研究報告』第40巻、7-15頁。
- 林正子 1996 「総合雑誌『太陽』における<大正生命主義>の萌芽—高山樗牛・姉崎潮風のドイツ思想・文化受容と日本文明批評—」『岐阜大学教養部研究報告』第34号、13-38頁。
- 林正子 1998a 「『太陽』文芸欄主筆期の高山樗牛—個人主義的国家主義から絶対主義的個人主義への必然性—」『日本研究：国際日本文化研究センター紀要』第17号、303-340頁。
- 林正子 1998b 「総合雑誌『太陽』掲載の高山樗牛と姉崎潮風の文明評論—二十世紀初年の日本におけるドイツ思想・文化受容の一面とその意義—」『岐阜大学国語国文学』第25号、17-34頁。
- 原田實 1957 「教育者としての坪内逍遙」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第3号、55-72頁。
- 土方定一 1933 「高山樗牛とニーチェ」『歴史科学』第2巻第7号、白揚社、98-101頁。
- 藤田昌志 2012 「高山樗牛の日本論・中国論」日本比較文化学会編『比較文化研究』第101号、15-28頁。
- 船山謙次 1957 「井上哲次郎の教育思想—国民道徳論を中心に—」『北海道学芸大学紀要』第8巻第1号、1-15頁。
- 本田康雄 1992 「新聞小説と坪内逍遙—読売新聞を読んで—」『国文学研究資料館紀要』第18号、347-373頁。
- 前田愛 1973 「井上巽軒と高山樗牛」『日本近代文学』第18集、三省堂、35-46頁。
- 増田周子 2009 「教育者としての坪内逍遙にみる東アジアの知的伝統」『東アジア文化交渉研究』第2号、67-80頁。
- 松原岳行 2011 『教育学におけるニーチェ受容史に関する研究—1890-1920年代のドイツにおけるニーチェ解釈の変容—』風間書房。
- 松原岳行 2020a 「中島半次郎の教育学におけるニーチェ受容とその特質」『九州産業大学国際文化学部紀要』第75号、113-136頁。
- 松原岳行 2020b 「長田新の教育学におけるニーチェ受容とその特質—生の哲学者としてのニーチェ像の意味—」『九州教育学会研究紀要』第47巻、49-56頁。
- 松原岳行 2020c 「篠原助市の教育学におけるニーチェ受容とその特質 (1)—1920年代の著作『批判的教育学の問題』、『教育辞典』、『理論的教育学』を中心に—」『九州産業大学国際文化学部紀要』第76号、45-69頁。
- 松原岳行 2021a 「篠原助市の教育学におけるニーチェ受容とその特質 (2)—1930年以降の著作『教育の本質と教育学』、『増訂・教育辞典』、『独逸教育思想史』、『教育哲学』を中心に—」『九州産業大学国際文化学部紀要』

第77号、63-92頁。

松原岳行 2021b「田制佐重の教育学におけるニーチェ受容とその特質」『九州産業大学国際文化学部紀要』第78号、27-55頁。

松原岳行 2022a「小西重直の教育学におけるニーチェ受容とその特質」『九州産業大学国際文化学部紀要』第79号、1-37頁。

松原岳行 2022b「渡部政盛の教育学におけるニーチェ受容とその特質」『九州産業大学国際文化学部紀要』第80号、1-35頁。

松原岳行 2023「明治期のニーチェ主義と教育学（1）—非学問的なニーチェ思想の学問化—」『九州産業大学国際文化学部紀要』第81号、15-38頁。

松原真 2019「小説隆盛と新聞メディア—明治二〇年前後の新聞小説について—」一橋大学全学共通教育センター編『人文・自然研究』第13号、194-211頁。

松本三之介 1996『明治思想史—近代国家の創設から個の覚醒まで—』新曜社。

湯浅弘 2004「日本におけるニーチェ受容史瞥見（1）—西谷啓治のニヒリズム論をめぐる—」『川村学園女子大学研究紀要』第15巻第2号、97-111頁。

湯浅弘 2007「日本におけるニーチェ受容史瞥見（2）—ニーチェをめぐる明治期の言説（1）—」『川村学園女子大学研究紀要』第18巻第1号、39-45頁。

ルッデマルコ 2022「伊沢修二と坪内逍遙の文化改良論と社会進化説—明治中期の日本ナショナリズムについての一考察—」金沢大学大学院人間社会環境研究科編『人間社会環境研究』第43号、41-56頁。

和田繁二郎 1960「坪内雄蔵における文学意識と啓蒙意識の相剋」立命館大学日本文学会編『論究日本文学』第13号、11-15頁。

渡辺和靖 1978『明治思想史—儒教的伝統と近代認識論—』ベリかん社。

Becker, H.-J. 1983: Die frühe Nietzsche-Rezeption in Japan (1893-1903); Ein Beitrag zur Individualismusproblematik im Modernisierungsprozeß. Wiesbaden.

【付記】

本研究はJSPS科研費JP21K02275の助成を受けたものです。